

始



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50^{16m} 1 2 3 4 5

曲譜
正調
筑前琵琶歌



特



唯我首をたらし

義経に見せ給へ

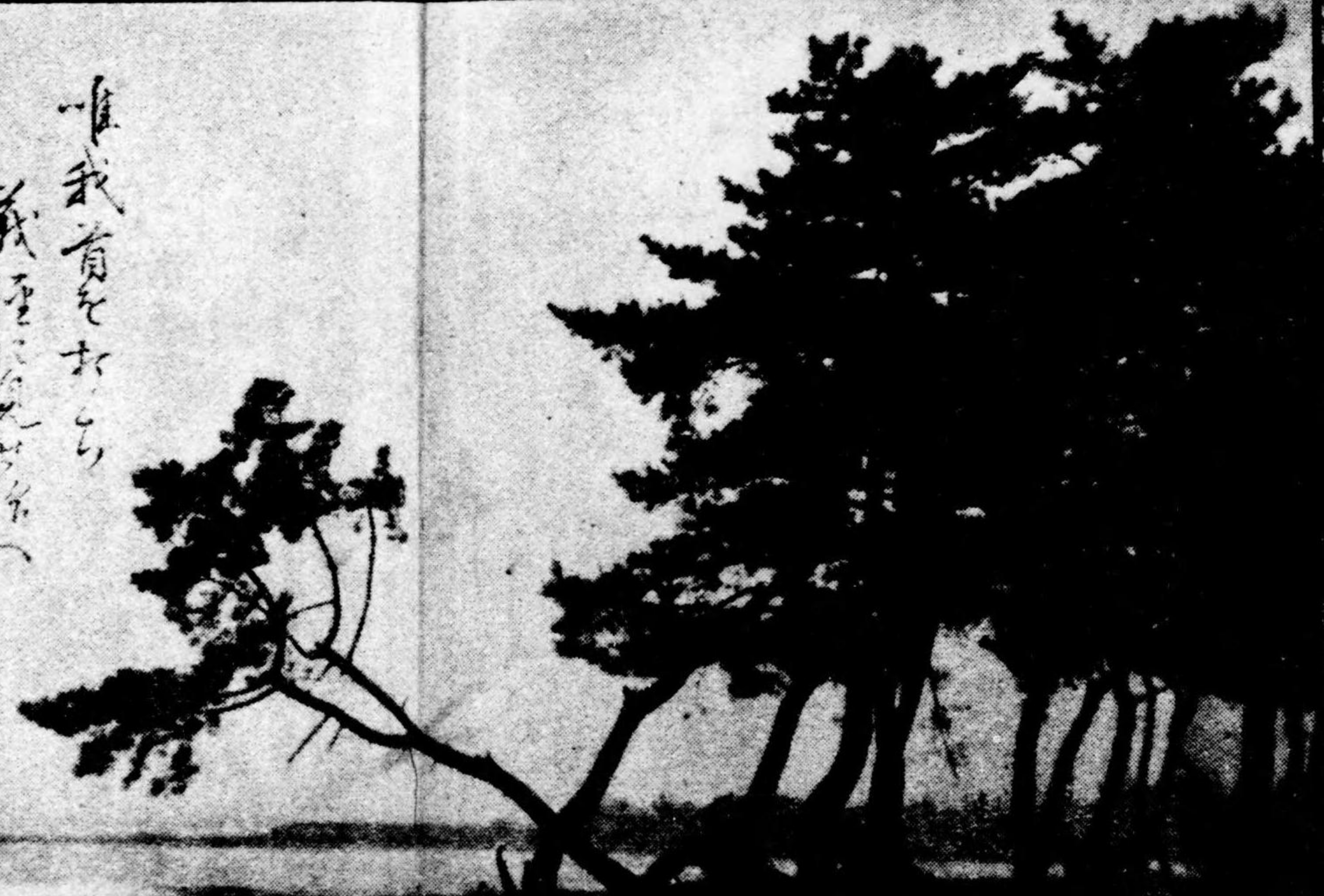
若し見知らず

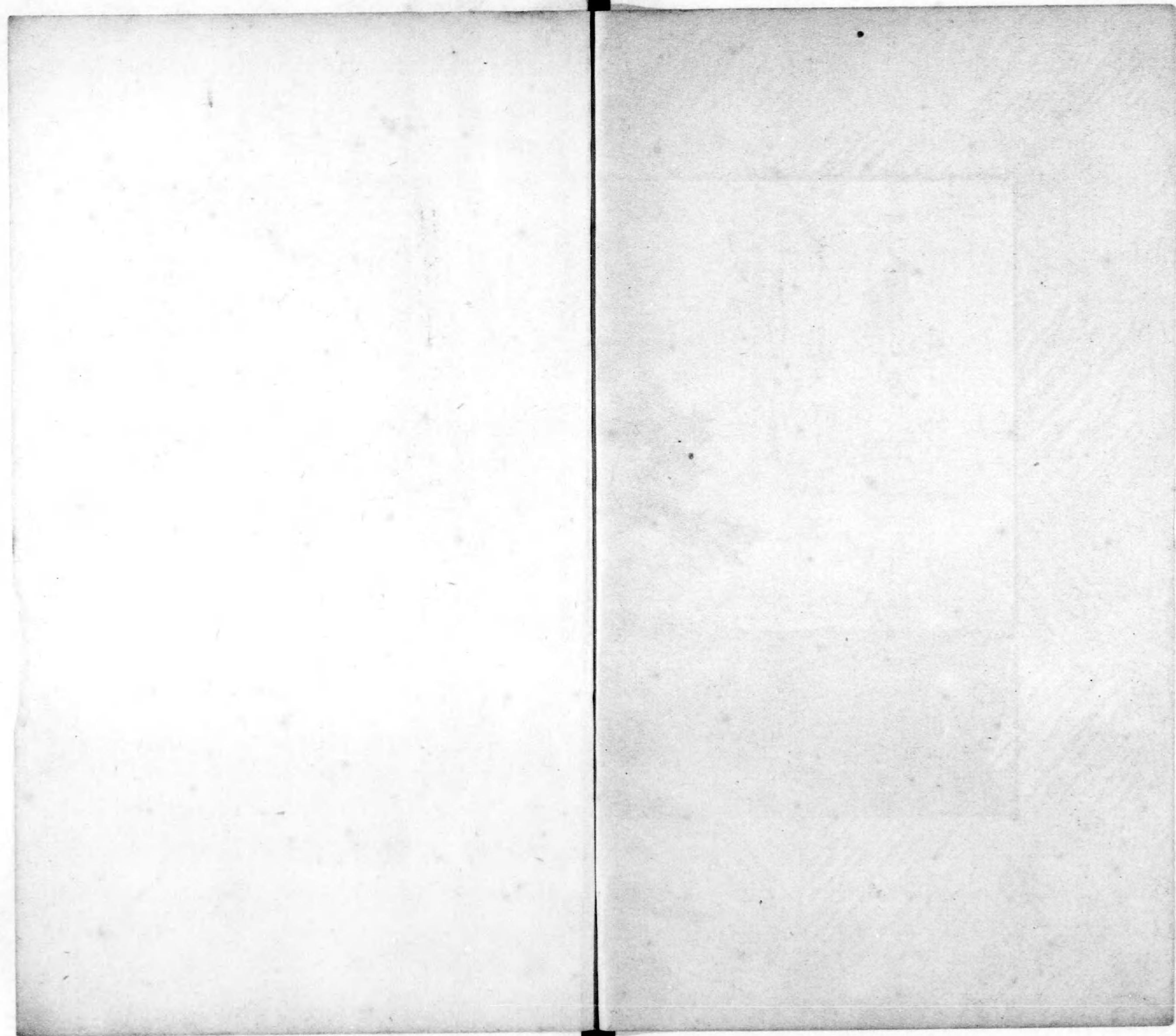
たゞは

角の冠者に

見せ給へ

(教盛)





正曲
調譜
筑
前
琵琶
歌

井上筑風作曲
筑風會發行

大正
1.11.20.
丙寅

特101
53

曲節の譜

7

流しの譜

人

合の手

王

緩急の度合を示す

ろ

全を全しく少し揺るべきを示す

三

一句を少し緩ならしむべし

〽

揺るりつゝ下へべきを示す

其他は合の手と知るべし

〽

揺るりつゝ上へべきを示す

ろ

語尾を軽く切るべし

〇

語を切ると知るべし

乙二二三
四五六七

敵の出し方 (謹む方)

||

續き

Z

揺るりつゝ乙の敵迄下げ

曲節の例

春節の例

(小督の局)

^春道の^{上六上}葉^五りも絶へたれば

^中真萩^上おす^一き^二芥^三茅^四を

^下馬^上の^三蹄^一めに^二踏^三み^四だ^五き^六ん

春節寝調の例

^春道の^{上六上}葉^五りも絶へたれば

(以下ハ合シト知ルベシ)

秋節の例

(湖水渡)

^秋光^上俊^二や^三が^四て^五唐^六舞^七乃^八瀨^九の^十此^{十一}方^{十二}に^{十三}打^{十四}ち^{十五}上^{十六}り^{十七}て

馬^一物^二の^三具^四の^五水^六は^七せ^八る

夏節の例

(太田道灌)

指く行衛は白雲や
まふはかきり櫻思
競ふ駒のしらすら
ただひかれぬ霞が関
鶯

夏節 變調の例

指く行衛は白雲や
まふ許りの櫻思
競へ駒のしらすら
ただひかれぬ霞が関

冬節 の例

(赤垣源藏)

残れ言葉の本におし
露の命の果敢なき
すしに似たる鐘の音
諸行無情と響けり
時鳥

五及び四句流の例 (海洋島)

朝日は匂ふ秋津波
扶桑國を名にめぐり

千代田中三萌四や一民草二や

みどり四を一敷五ける一鳩三の一海二

比叡下三の山影一うつ二る三らん四

初音

夏六
馴一古七巢一見納三め二

一夜の鶴
打ち振三り返一り耽四む一れ二

中三
後見送一と入二かぬ三

下三
人も情一の村時二雨三
磯千鳥

旭 山越節の例

(四條畷)

旭七
ト一如二吉六野一の山櫻永

中
盛三りも一また二を一北風一に

(以下畧ス)

(平野次郎)

山七
巖一の皮六あ三し二り掛一け二乃三

中五
天刀一を二佩三きたる四其様一は

(以下普通ノ流ニ全ジ)

大落しの例

(扇の的)

数矢と射切て矢は海に

大五六
扇は空たひらからる
四五六三
山嵐四丁

筑風會設立の趣旨

近時筑前琵琶が一般家庭の音楽として、漸次普及されつゝあるは否定することの出来ない事實であつて、吾人も亦其理由と結果とを認識する一人であるが、惜らくは琵琶演奏者の往々品性を無視して没常識に流るゝ傾向ある一事であつて、筑前琵琶の發展上大いに悲まざるを得ないのである。

元來筑前琵琶の生命的價値は、歌詞の高尙と餘韻の神秘的なるにあつて決して彼の娘義太夫の高座に上る時の如き淺陋しき虚榮を以て目的とするものではない。苟くも筑前琵琶が一種の家庭音楽として社會より認識され、又堅

く自信する以上は、すくな 尠くとも其處に藝術的氣分が現れて居なければならぬ。
 藝術的觀念を有たぬ琵琶演奏者は、如何に其節廻しや琵琶の音が美妙であらうとも、だん 斷じて藝術的價値を認めることは出来ない、とせう 遂上して聴く三味の爪弾ほどの憧憬も感じないのである。

茲に於て吾人は、通信教授を目的とする筑風會なるものを設立した。本會は不知不識の間に退歩して、墮落の淵に近つかんとしつゝある現今の筑前琵琶界に自覺の征矢を投ぐると同時に、一面に於ては先覺者の態度を明瞭にし、無智の彈奏者に常識を養成して品性を高からしめ、琵琶歌の新作は勿論、新式の曲譜と文字に現したる琵琶の音調とを通信して、闇夜の燈臺ともなり羅針盤ともなるべ

き拘負と確信とを以て徹頭徹尾筑前琵琶の發展と普及とに盡力するものである。
 右の趣旨を以て設立したる我が筑風會は、長く設立を紀念せんが爲め今回一曲譜正調筑前琵琶歌なる小冊子を發行して、新入會員に限り巻末に附する處の筑風會法規第七條の入會金參拾錢納附と同時に、本書を一部宛贈呈することにした。

大正元年九月

筑風會にて

井上筑風識

彈奏者の心得

■ 彈奏の態度

井上 筑風

彈奏するに際して第一注意を要するのは姿勢即ち態度である、態度の如何に依つて聽者をして悪感情を抱かしめるものだ。姿勢は成べく身體を眞直にして琵琶の持方は琵琶の『テンチン』と自己の肩と平均する具合にしなければならぬ。それからよく顔を無暗に横に振

りながら拍子を取つて謠ふ彈奏家をよく受見る事があるが、それはよくない事だと思ふ。自己の修得せる節を拍子に依つて其速度を定めるのは實際好い事ではあるが、出來得る限り聴者に氣付かれぬ様注意して、或は左手に依るか但しは足の指先きを動かしながら拍子を取る位にとゞめたい。

■ 歌曲は誠意を旨とし自然を謠ふべし

彈奏する時には、一通り歌の意を解し、歌中の人たるべきは勿論

であるが歌中に現れたる人物背景に自己の經驗せる悲哀憂愁其他の感情を應用して謠はなければならぬ、自然でなくてはならぬ、況んや筑前琵琶歌は就中自然を尊んでゐる。歌の意味を了解して出來得る限り無理のないやうに言葉そのものを判然と謠ふ事に留意しなければならぬ、況して筑前の流しに至るとどうかすると、何を謠つてゐるのかすつかり解らぬで終る事がある例へば『墨繪の龍の陣羽織』を墨繪の龍のジンバア・オ・リと節をつけて見たなら何の事やら一寸解するに困難である。然るに墨繪の龍のと出してデンバオと一寸

解らない程を切つてすぐオリー……と謡つたなら少しは歌詞が活きて來るではないか、まあ一例に過ぎないのであるが是迄に留意したなら立派に歌中の人物なり事物が活きて來る。無理な節を附ける位の聞苦しい事はない、近來大阪も多少琵琶歌そのものを解して來て聲の如何より節廻しを專ぶ傾向を生じて來たのは嬉ぶべき現象である、歌そのものが完全に出來てゐるとしても琵琶の奏法が不完全であつたならば決して聽者をして、手に汗を握らすといふ感動は起らない。合の手も同じく歌に依つて其れぐ適當した弾き方が必要である。

ある。

■ 音聲に就いて

音聲は成可口先の聲に走らずして腹の底から出る、力ある聲の研究を積まれん事を切望する。そして聲量ある音量に任して歌を艶つべく謡ふのはよくない、何故好くないかと云へば前項にも述べた如く大切な歌詞を破壊する恐れがあるからである。音聲の研究は常に心掛けて置かなくてはならぬ、左に音聲研究に際して注意すべ

き條項を示して置く。

六

▲刺激物を飲食せざる事 ▲茄子の類を食さぬ事、

▲音聲の研究に就いては毎晩約一時間に渡つて自己の常の調子

より半分乃至一本の調子にして段物の研究をなす事、但し

一日も怠るべからず、

▲毎日一度宛必ず肉食する事 ▲美音錠、又は大音聲の如き賣

薬を服用せざる事、

右に示した如き條項を守つたららば、約一ヶ月後慥かに目醒しい音

聲が出来る。而して斯の如き音聲の研究を積める間も成るべく乙の
聲の研究も大いに必要である。音聲無く悲觀する人達には慥かに必
要であると思ふ『聲がないで實に困る』と云つて歎してゐる人達を
見ると實際可笑しくなつて笑はずに居られない。其人々に依つて持
有の音聲を發揮しないから悲觀するのである。終りに臨んで之れは
自分の經驗談であると附記して置く。

七

正曲調譜 筑前琵琶歌目次

目次	○敦 <small>あつ</small>	○敦 <small>あつ</small>	○城 <small>しろ</small>	○蓄 <small>つほみ</small>	○白 <small>びやく</small>	○小 <small>こ</small>	○廣 <small>ひろ</small>
				の	虎 <small>こ</small>	督 <small>とく</small>	瀬 <small>せ</small>
						の	中 <small>ちゆう</small>
	盛 <small>もり</small>	盛 <small>もり</small>	山 <small>やま</small>	花 <small>はな</small>	隊 <small>たい</small>	局 <small>つほね</small>	佐 <small>さ</small>
	盛「下段」	盛「上段」					
三三二八二四一七一二七一

歌譜號

○	●	、	切	△	合	『
.....大中地切吟合流
.....干(七ノ聲)干(六ノ聲)語(三ノ聲)り替ノ手シ(春夏秋冬)

歌 琶 琵 前 筑

目次	○ 川 <small>かわ</small>	○ 河 <small>かわ</small>	○ 松 <small>まつ</small>	○ 太 <small>おほ</small>	○ 扇 <small>あふぎ</small>	○ 竹 <small>たけ</small>	○ 盆 <small>はち</small>	○ 粟 <small>あは</small>	○ 粟 <small>あは</small>
	中 <small>なか</small>	内 <small>うち</small>	の	田 <small>た</small>	の	林 <small>はやし</small>	栽 <small>の</small>	津 <small>づ</small>	津 <small>づ</small>
	島 <small>しま</small>	宿 <small>やど</small>	下 <small>か</small>	灌 <small>くわん</small>	的 <small>まと</small>	七 <small>しち</small>	樹 <small>き</small>	原 <small>はら</small>	原 <small>はら</small>
	原「下段」	原「上段」
	一三八	一三四	一二八	一二一	一一四	一〇八	一〇一	九四	八九

歌 琶 琵 前 筑

目次	○ 海 <small>かい</small>	○ 臺 <small>たい</small>	○ 静 <small>しづか</small>	○ 静 <small>しづか</small>	○ 備 <small>びん</small>	○ 錦 <small>にしき</small>	○ 錦 <small>にしき</small>	○ 常 <small>ひた</small>	○ 赤 <small>あか</small>
	洋 <small>やう</small>	灣 <small>わん</small>	御 <small>ご</small>	御 <small>ご</small>	後 <small>のち</small>	の	の	陸 <small>ち</small>	垣 <small>ぎ</small>
	島 <small>しま</small>	入 <small>いり</small>	前 <small>ぜん</small>	前 <small>ぜん</small>	郎 <small>らう</small>	旗 <small>はた</small>	旗 <small>はた</small>	丸 <small>まる</small>	藏 <small>くら</small>
	前「下段」	前「上段」	旗「下段」	旗「上段」
	八一	七五	六八	六一	五六	五二	四八	四三	三八

廣瀬中佐

浪を蹴立なみ けたてて進みゆくすす合……

中干

數度の夜打すど ようちに怖おそれをなし、

いと嚴重げんぢゆうに警戒けいかいし、

光ひかりの下もとによく見みれば、

中干

二十餘艘よそう にほん かんたいの日本の艦隊、

此有様このありさまを見るみるよりも、

撃うてやかゝれの號令ごうれいも

其筒音そのつとは百雷ひゃくらいの、

大干

港みなとを守る敵艦あまた まもは、

又不意打またふいうちもあらんかと

探海燈たんかいとうを照てらしつゝ、

又またもや寄よせし閉塞船へいそくせん、

舳艫列ちくろつらねて押寄おしよせたり合……

夥多あまたの要塞艦艇えうさいかんていは

あとや先さきなる亂みだれうち合……

轟とどろきわたる如ごとくにて、

大干

飛とび來くる丸たまは凄すさまじく、

降ふり注そぐが如ごとくなり。

夏

『福井米山千代彌彦丸ふくい めいやまち よや ひこまる』

我團結わがだんけつの勇士等ゆうしらは、』

旅順りょじゆんの口くちに猛進もうしんす合……

福井丸ふくいまるに乘込のりこみしが、

早々はやく船ふねを沈しづめよと、

豫かねて任務にんむに當あたりたる、

廣瀬中佐

中干

雨あめか霰あられかしら雪ゆきの、

去されども之これを物ものともせず、

四隻しせきの船ふねに分乗ぶんじやうせし、

逆卷さかまく怒濤どとうを蹴破けやぶりて、

斯かくて廣瀬中佐ひろせ ちゆうさは

豫よてい定の位置いちに達たつせし頃ころ、

一ひと聲こゑ高たかき號令ごうれいに、

兵曹長杉へいそう ちやうすぎの孫七承まこと うけたまはり、

廣瀬 中佐

爆發藥に點火せんと、

折もこそあれ敵艦より、

福井丸に命中し……

船は烈く動揺し、

されば端艇を繰下し、

さて人員を検むれば、

地語 あたりには影は見えざりけり合 大干

情に深き武士なれば、

急ぎ船艙に下り行く合……

放ちし魚形水雷は、

轟く音ともろともに、

はや沈没し始めたり。

一同之に乗移り、

地語 杉野兵曹長只一人、

中佐は部下をいつくしむ、

杉野の所在を尋ねんと、

一度船に立ち歸り、

船體次第に傾きて、

中佐は己を打忘れ、

隅なく搜る船の中、

地語 消えて果敢なき有様に、

地語 最早是れ迄なりと端艇の、

中干 飛び来る敵の彈丸は、

アツと言ふ間もあらばこそ、

廣瀬 中佐

呼べど答ふる者もなく、

愈々危険迫れども、

再び三度往返り、

姿は遂に水泡の、

今は詮すべあらざれば合……

地語 切るや一刹那、

あはれ中佐に命中し、

血汐はあたりに迸り、

廣瀬中佐

姿は見えなすなりにけり合……

大干 唯一片の肉塊を、

地語 名譽の死を遂にけり合……

七生國報

地語 嗚呼廣瀬中佐の誠心の、

千代萬代の後までも、

我日の本の日の旗と、

語り傳へて残さなん。

流石に猛き武士も、

戦死の形見と留めつゝ、

合笑上船

春 『玉と碎けし勳功は、

武士の鑑とたゞへられ』

切 共に世界に輝きて、

小督の局

扱も櫻町中納言、

小督の局と申しけるは、

君の御寵愛淺からず合……

斯ぞと思ひ合されしが、

中干 花に嵐の妬とかや、

地語 怨める由を聞き給ひ、

小督局

重範卿の御息女、

禁中第一の美人とて、

驪山宮の故事も、

大干 月には雲の仇ありて、

時の相國清盛の、

地語 身は數としも思はねど、

小督局

我このまゝに仕へなば、

大千 心定めしうば玉の、

地語 内裏を忍び出で給ふ。

世に譬ふべき物もなく、

悩ませ給ふ御有様、

夏 『折しも中秋三五の夜、

御聲いと曇らせ給ひ』

地語 小督は嗟峨のわたりなる、

君の御爲に悪かりなむと、

闇をたよりに本意なくも、

されど君の御嘆き、

晝はひねもす夜は通夜ら、

よその袂も朽ぬべし、

月は澄めども御涙に、

いかに仲國承はれ、

地語 片折戸せし賤が家に、

忍び居る由聞つるぞ、

尋ね來よとぞ仰せける。

寮の駿馬に跨りつ、

春 『月毛の駒に心して、

急ぐ心の行方かな』

大千 金盤ひやゝかに、

貝闕寒しとかや。

大千 其山里と詠じけん、

小督

汝是れよりおもむきて、

されば彈正大弼仲國、

やがて出づるや秋の夜の、

雲井にかけれ時の間も、

大千 露は玉屑に和して、

月は珠光を射て、

在五の主の男鹿鳴く、

嗟峨のわたりの秋の夜の、

小督局

命いのちと陰すたく虫むしの音ねと、

地上ちじやうの星ほしと見るみゆまで、

春春『道みちの衆しほりも絶たえたれば、

馬うまの蹄ひづめに踏ふみしだき、

尋たづねわびつ、仲國なかくには、

しづく馬うまを打うたせける合……

地語 内裏だいりを出いでさせ給たまひてより、

名残なごりの露つゆに袂たもとさへ、

秋 『共ともに澄すみゆく月つきの影かげ、

光ひかりは露つゆか玉銚たまほこの』合……

真萩まはぎおすまはぎきかるかやを、

大干 遠おちの賤しづが家近やちかの門かど、

地語 法輪はうりんの方かたへ志こころざし、

悼いまましや小督こごうの局つぼねは、

日數ひかずも茲こゝに故郷ふるさとの、

乾かはく間まもなき物思ものおもひ、

大干

明日あすは大原おほはらの別所べつしょへと、

地語 嵯峨野さあがのの秋あきの月影つきかげも、

琴取出こととりいでで端近はしちかう、

月つきは天心てんしんに澄すみ昇のぼりて、

山越 『何なにをかくねる女をんな郎花へし、

人ひとに語るかたも耻はづかしと』合……

地語 遠音とほねに冴さへて通かよひ来る合……

小督局

中干

かねて心こころに期たまし給たまへば、

地語 座ざにつき給たまふ時ときしもあれ合……

冬 『塵ちりと見るみべき雲くももなし、

秋あきや恨うらむる戀こひぞうき』合……

我われも憂世うきよのさかの身みぞ、

かきなす琴ことの自おのづから

地語 峰みねの嵐あらしか松風まつかぜか、

白虎隊

地語

尋ぬる人の琴の音か、
爪音しるき想夫戀合

地語

心しづかに仲國は、

切

庵へこそは着にけり、

白虎隊

維時慶應戊辰の秋、

地語

八月二十三日の曙や、

駒を止めて聞く程に、

さては小督の局ぞと、

露深き草原を踏分けく、

庵にこそは着にけり。

甲干

明て悔しき戸の口に、

敵の兵船みづうみを、

はや分け登る笹山路。

邀へ撃たんと少年の、

忠義の二字に身を固め、

命を鴻毛の軽きに置き、

『忠勇義烈の武者振は、

此一團ぞ名にし負ふ』合

白虎隊

走せ着く甲斐も渚漕ぐ、

渡りて跡はしら浪と、

雲か霞か將た山か、

人数もわづか三十七合

危急の難に氣を勵み、

節を九鼎の重きに置き、

人の花てふ雅兒櫻、

群羊を驅る白虎隊合

大千

白虎隊

しばし奮戦防ぎしも、
斧の臂にことならず

地語

残るところの十六士、
丘の麓にしりぞきて

大千

君の御先途見奉り、
創をつゝみ劍を杖つき、

大千

こはそも如何に悲しやな、
鶴が城のありさまに、

中干

衆寡敵せず蟻螂の、
無惨やつひに敗績し、

礮烟彈雨の中を過ぎ、

中干

斯ては今ぞ是非もなし、
我等が進退決せんと、

漸く飯盛山に攀登れば、

渦巻く黒烟舞ひ上る、

無限の感慨湧出て

地語

報ひん時は斯としも、
十六年がそのあひだ、

臣等の事遂に畢りぬ。
孤城天下の大兵を受け、

折もこそあれ敵軍の、
鯨波天地にふるひ、

落る涙は瀧澤の、

地語

遙に城中を伏し拜み、
君ほろび國滅す、

中干

嗚呼君候よ我父母よ、
受けし御恩や慈愛、

豫て諦め居つれども、

白虎隊

きのふまみへし俤や、
耳目に今も留まりて、
さは言へ暫し移しなば、
いざ諸共に泉下にて、
最いさぎよく決心し、
與に敢果なく消にけり。
朽ぬ名こそは千代かけて、
王師に逆ひし罪あるも、

御訓戒の言の葉も、
盡きぬ名残をいかにせん
敵の妨害受くるべし、
残る忠孝つくさんと、
飯盛山のあさつゆと、
『幹は枯れても若松の、
常盤堅岩に遺るらめ』
其操や愍むべし 合

忠烈悲壯の魂魄は、
苔むす下に吊らはむ。

蕾の花

盛りの花も散るは常、
源氏の棟梁左馬の頭と、
地語 平治元年十二月、
武運拙なく打敗れ、

蕾の花

苔むす下に吊らはむ、

有爲轉變ぞ是非もなき
世に時めきし義朝も、
平家方との合戦に、
都を逃れ出で給ふ。

蕾の花

大千ちとせ偕ともも落ち行く人々は、
主しゅ從じゆう僅わづかに二十餘騎、

夏なつ『立木たつきもいざや白雪しらゆきを、

覺おぼ束つかなくも辿たどりしが』合あひ……

地語ぢご鎌田兵衛政家を、

我等われら都みやこを落去おちさらば、

姫ひめは敵てきにぞ囚とられん、

姫ひめを殺ころして來きたれよと、

中干ちとせ朝長あさなが頼朝よりとみを始はじめとし、

唯ただすごくと遠近おちこちの、

馬うまの蹄ひづめに踏ふみしだき、

やがて義朝よしとも馬うまを止とどめ、

ほとり間近まぢかく招寄まねきよせ合あひ……

汝なんぢが許もとに残のこしつる、

汝なんぢ是これより引返ひきかへし、

中干ちとせつれなき様やうにて慈悲じひこもる、

蕾の花

君きみが仰あふせをかしこみて、

都みやこの方かたへ返かへりけり合あひ……

流ながれも清きよき源みなもとの、

讀どき經やうに勤つとめ居ゐたりしが、

汝なんぢよくこそ歸かへりしよな、

流石さすがは武門ぶもんの姫ひめなれば、

訊たづね問とはさせ給たまふにぞ、

暫しばし口籠くごもり控ひかへしが、

政家まさいへう馬うまを翻かへしつゝ、

茲こゝに六條堀川むつじょうほりがわの、

義朝よしともの長女ちやうぢよ扶桑ふそう姫ひめは、

政家まさいへうの入り來きる姿すがた御覽みまはし、

戰いくさの模様もやうは如何いかぞやと、

秋あき『年端としはゆかねど凜り々りしくも、

政家まさいへうハツと胸迫むねせまり』合あひ……

漸あく僅わづかに顔かほを上げ、

蕾の花

今日の戦不幸にも、
大將には東國へ御開き、

大干

さては父上には東へ、
嗚呼今の今までも、

地語

顔打ち覆ひ伏し給ふ合……
政家涙に咽び居たりしが、
父君には姫の御身憂させ、

地語

此政家を歸し給ひて候、

味方利を失ひ候ゆへ、

あるべしとの御事にて候。

中干

御下向あらせ給ふとな、
御勝利のみ祈りしをと、

中干

御心さこそと推測り、
轟く胸を押鎮め、
故ら見極めまゐれとて、
聲ふるはせて申しければ、

蕾の花

大干

せめて名残に父上に、

是迄のこゝろ使ひ、

我幼少にして母上に後れ、

理せめて哀れなり合……

御供とては叶はずと、

軍に従ひ出でつるに、

女子程かなしき者ぞなし。

姫は容姿あらためて、

中干

惟ふに貴き賤きも、

弟頼朝は十三歳にあり乍ら

妾は一つ優りの姉なるに、

又も歎かせ給ふこそ、

地語

姫は涙を堰止めつゝ、

汝が許に養はれて、

明暮過分に思ひしぞや合……

中干 謁見たしとは想へども、

戀の花

御跡おんあとしたふ事こともなり難がたし、

父上ちやうへの御心安みこころやすめよと、

地語

合掌がっしょうしてぞ待ち給たまふ。

襦袢むつぎの上うへより侍かしづきて、

蕾つぼみの花はなを散ちらすとは、

涙なみだの闇やみに迷まよひしが、

地語

さらば御隣おんいとしくは候さふらへども、

背後うしろに立たちは立たちつれど、

今は唯いま我首わがくびを斬きり、

最雄いとを々のたましくも宣のたまひて、

中干

鎌田兵衛かまたへうえは姫君ひめぎめに、

茲こゝに十四年ねんの春はるを迎むかへ、

前世ぜんせい如何いかなる罪業ざいごうぞと、

地語

詮方せんかたなくも諦あきらめつ。

御首級おんしるし下くだし賜たまはれと、

中干

髪黒々かみくろくろくと頸清くびきよく、

源氏げんじの息女そくぢよと仰あふがるよ、

見るに目めも暮くれ心消こころきえ、

カラリと落おとす太刀たちよりも、

百萬まんの敵てきに恐おそれざる、

暫時しばしためらひ居ゐたりしが。

はや討手うっての軍勢ぐんぜい寄よつるに、

急遽いそがに姫ひめを抱かへつゝ、

近江路あふみぢさ指さしてぞ落おちにけり、

果報くわほうめでたき後うしろ影かげ、

五體たいしび痺しびれて立たちすくみ、

胸むねを切きりさく思おもひの刃やいば合あ……

天晴あつはれ武勇ぶゆうの政家まさいへも、

折おりしも聞きゆる人馬じんばの響ひび合あ……

斯かくては猶豫いうよなり難がたし、

竊ひそかに背門せいもんより忍出しのびいで、

近江路あふみぢさ指さしてぞ落おちちにけり。

蕾の花

城山

城山

地語

夫れ達人は大觀す、

中干

榮枯は夢か幻か、

眞如の月の影清く、

何を怒るや怒り猪の、

勇みに勇むはやり雄の、

留まり難きぞ是非もなき、

地語

拔山蓋世の勇あるも、

大干

大隅山の狩坐に、

無念無想を觀ず、ん 合

俄かに激する數千騎の、

騎虎の勢ひ一轍に、

唯だ身一つを打棄て、

城山

若殿原に報ひなん 合

諸手の軍打破れ、

大干

霜の紅葉の紅の、

薩摩武雄のおたけびに、

霰たばちる如くにて、

木魂に響く鯨波の聲、

落つるが如き有様を、

あな勇ましの人々や、

明治十年の秋の末、

討ちつ討たれつやがて散る、

血汐に染めど返り見ぬ、

打散る玉は板屋打つ、

面を向けん方ぞなき 合

百の雷一時に、

中干

隆盛打見てホ、と笑み、

亥の年以來やしなひし、

城山

腕うでの力ちからも試ためし見て、

いざ諸もろ共に塵ちりの世よを、

孤軍こぐん奮闘ふんたう衝圍かこみ破やぶ

吾劍わがけん折すて已におれ吾馬わがうま斃またほ

唯ただだ一言ことを殘のこしおき、

『宗徒むねとのともがら諸もろ共に、

心こころの内うちこそ勇いさましけれ 合

昨日きのふは陸軍りくぐん大將たいせうと仰あふがれ、

心こころに殘のこる事こともなし 合

脱のがれ出いでんは此この時ときなりと、

一いつ百びやく里り程ぢやく壘壁いへき間あひだ

秋風しゅうふう埋骨ほねをうづむ故郷こきやう山のやま

桐野村田きりのむらたをはじめとし、

煙けむりと消きえし大丈ますら夫をの、

官軍くわんぐんこれを望のぞみ見みて、

君きみの寵遇てうぐう世よのほまれ、

中千

類たぐひなかりし英雄えいゆうも、

山下露やましたつゆと消きえ果はて、

無情むじやうを深ふかく感かんじつゝ、

唯ただだ悄然せうぜんと隊伍たいごを整ととのへ、

折おりしもあれや吹ふき下おろす、

岩間いわまにむせぶ谷水たにみづの、

悲鳴ひめいするかと聞ききなされ、

鎧よろひの袖そでを濡ぬしけり。

地語

今日けうは敢あへなく岩崎いわさきの、

移うつれば變かはる世よの中なかの、

無量むりやうの思おもひ胸むねに満みち、

目めと目めを見み合あはす許ばかりなり 合

『城山松しろやまつの夕ゆうあらし、

無情むじやうの聲こゑも何なんとなく』

鎧よろひの袖そでを濡ぬしけり、

城山

敦 盛

敦 盛 (上 段)

祇園精舎の鐘の聲、

娑羅双樹の花の色、

地語

驕る平家の榮華の夢も、

嵐に醒めて明石潟、

啼く音を礎に残しつゝ、

中干 茲に平家方の一門にて、

諸行無情の響きあり、

地語

盛者必衰の理を現はす、

ひよどり越へを吹き下す。

須磨の浦曲の友千鳥、

影は浪間にかくれけり合

参議經盛の三男、

無官の太夫敦盛は、

駒を早めて唯一騎、

既に御座船も兵船も、

詮方浪に駒をいれ、

地語

心の中の淋しさを、

大干

むれを離れし子雀の、

哀れと云ふも愚なり合

如月七日の曙に、

敦 盛

父兄弟のあとをしたひ、

連れも渚につき給ひしが合

遙かの沖に漕出ければ、

四五段ばかり泳がせ給ける。

推し測り参らするに、

ねぐら索むる風情にて、

中干

時しも頃は壽永三年、

吹きすすみたる北風の、

敦 盛

冬『名残は猶も絶果て』

淡路島根や阿波の沖』合

駒の足搔もにぶりつゝ、

任せて手綱かいくりつ。

引き返さじと祈れども、

山抜く力軟よ竹の、

ゆたのたゆたに漂ふは、

立田の川に散り浮ぶ、

身の浮き沈み泡沫の、

山越『通ふ千鳥のそれならで、

今や行手も白浪に』

あせる心は梓弓、

地時あきに利あらず騅ゆかず合

青葉の笛を身に帯びて

秋『唯だひとひらの紅葉々の、

様とも見ゆる許りなり』合

敦 盛

斯りける處に熊谷の次郎直實
軍扇サツト打ち開き、
平家の御大將と見奉る、
見せ給ふものかな、

大干 敵に聲を掛けられて、

敦盛駒の立髪立なほし、

熊谷も駒を馳せ寄せて、

テウくハツしと切結びしが、

はるかに見とめ迫ひ來り、

其れに渡らせ給ふは、

まさなふも敵に背面を、

中干 返させ給へ〜と呼はつたり合

中干 いかで猶豫のあるべきぞ。

汀の方に引返し給へば、

互に打もの抜きかざし、

忽ち馬上に引組んで、

敦盛

浪うち際にドウと落つ合……

熊谷遂に敦盛を組敷いて、

御兜を押し上げ見奉るに、

大干年はいざよひ桂の花、

地語 光あふれんよそほひは、

秋 『朝日の匂ふそれよりも、

晝かまほしき氣色なり』合……

年ばへ同じ小次郎に、

漸しが程は揉合しも、

既に御首上げんとて、

薄化粧に鐵漿黒々、

露もしたる玉の面……

地語 天津乙女の顔に、

一入まさるあでやかさ、

大干さすがに猛き熊谷も、

思ひ較べて手もゆるむ。

切 子を思はぬぞなかりける、

焼野の雉子夜の鶴、

敦盛 (下段)

去程に熊谷は、

地語 あまり御痛はしく候ゆへ、

御名を顯し給へかしと申しける……大干

今名乗らずとも隠れもあるまじ、

敦盛

貴き賤しき押なべて、

子を思はぬぞなかりける。

敦盛を抱き起し、

御助け進らせん去迎も、

敦盛靜かに御顔を上げ給ひ、

唯我首を打ち義經に見せ給へ

敦盛

若しも見知らずとならば、

蒲の冠者も見知らずとならば、

唯叢中に捨て給へと宣ひける。

地語

平家二十餘年の夢のあと、
打つも打たるも前世の因果、

大干

熊谷敦盛の御手を取り、
鎧の塵を拂ひ進らせける。

早や引揚げの陣鐘なりひいき、

蒲の冠者に見せ給へ、

其時こそは名もなき者とし、

さては曲緒ある公達にてぞおはすらん

權花一朝の榮に異らず、

忽ち悟る浮世の無情。

さらば此儘御落延給ひ候へと

折もこそあれ後の山に、

土肥梶原の一族ども、

中干

五十騎許り打群れて、

熊谷これに打ち驚き、

如何にもして今君を、

味方の軍兵近きたれば、

いかゞはせんと熊谷は、

敦盛靜かに熊谷をみそなはし、

地語

賤しき者の手に掛らば、
御身の如き情ある、

敦盛

此方を指して來掛りければ、

偕も御運の末と見へ奉る、

落し進らせんと思ひしも、

よも遁れさせ給ふ事叶ふまじ

深き愁に沈みけり合……

假令此處を通るゝも行先にて

なんばふ無念に候ぞ、

武夫の手に掛らん事本懐なり

敦盛

早首打てや熊谷と、

直實は此の御言葉を聴き奉り、

一入感じ居たりしが、

最早是非なしと諦めつ、

所詮御運もきはまれり、

後の供養をも仕らん、

敦盛遙に御座船を伏拜み、

無量の思やこもるらん

少しも動かさせ給ふ御氣色はなし

流石は平家の公達よと、

追々せまる馬蹄の音

斯く相成り候上は、

哀れ直實が手に掛奉り、

許させ給へと立上れば、

ほろりと落す一と雫、

漸くにして涙を打拂ひ、

いざさらば熊谷と、

熊谷は萎し腕にも、

申生者必滅會者定離、

太刀風荒く敦盛の、

鬼をもひしぐ熊谷も、

岩が根に生ふ松にだに、

嗚呼敦盛の健氣なる、

花の中なる花ならん。

赤垣源藏

合掌してぞ居たりける。

彌陀の利剣を揮かざし、

未來は一蓮託生と、

花の首を散らしけり

暫し斷腸の涙に暮けるは、

時雨のさそふ如くなり。

心の程は紅の、

ア、熊谷が情こそ、

赤垣源藏

源清き白旗に、

秋 『散すも散るも花の縁、』

露ぞ置きそふ一の谷』

地語 搔き鳴らしたる琵琶の音や、

切 四つの調べに残しけり、

赤垣源藏

黄昏告ぐる鐘の音も、

草木もなびく基ならん、

後問ふ人の袖の上に、

地語 昔語りを今爰に、

千代の松風千代掛けて、

調べの糸に傳へけり。

凍りがちなる寒風に、

地語

連れて降り来る白雲の、

報ふは今宵子の刻と、

人目欺く泥酔の、

大千

阿彌陀かづきの破笠に、

秋

『哀別離苦をぐひ呑の、』

柴田が宅の勝手口』合

如何暮させ給ふらむ、

地語

積る恨みの君の仇、

盟ふこゝろの赤垣が、

威儀亂したる千鳥足……合

中干

赤き合羽をまとひしは、

これや一世の別れぞと、

中干

今日の寒さに兄上は、

取次せよと命ずれば、

赤垣源藏

許多の奴婢は顔見合せ、

眉をひそめて鼻に袖。

御内室には御病氣と、

いとも本意なく思ひしが

『携へ來ぬる徳利酒、

半ば盡して起上り』

或る大名に抱へられ、

思へば長き月と日の、

何時もながらの酩酊に、

主人は御殿に出で給ひ、

つれなき言葉に赤垣が、

詮なき事とあきらめつ、

涙と共に飲みながら、

我は今回西國の、

明日は未明に立つぞかし、

浪々の身を種々に、

勞り給ひし御高恩、

朝霜暮雪の折なれば、

御夫婦共に百年の、

具に申し上げてよと、

『露の命の果敢さを、

諸行無情と響くめり』

外に立出で一雫、

道は迷はぬ忠心義士

死しても忘却仕らず。

必ずいとはせ給ふ様、

御壽命祈り奉る旨、

残す言葉の末に置く、

さとすに似たる鐘の音は、

早や小夜すぎと赤垣が、

ほろりと零す玉鉢の、

赤垣源藏

赤垣源藏

許多の奴婢は顔見合せ、

眉をひそめて鼻に袖。

御内室には御病氣と、

いとも本意なく思ひしが

『携へ來ぬる徳利酒、

半ば盡して起上り』

或る大名に抱へられ、

思へば長き月と日の、

何時もながらの酩酊に、

主人は御殿に出で給ひ、

つれなき言葉に赤垣が、

詮なき事とあきらめつ、

涙と共に飲みながら、

我は今回西國の、

明日は未明に立つぞかし、

浪々の身を種々に、

勞り給ひし御高恩、

朝霜暮雪の折なれば、

御夫婦共に百年の、

具に申し上げてよと、

『露の命の果敢さを、

諸行無情と響くめり』

外に立出で一雫、

道は迷はぬ忠心義士

死しても忘却仕らず。

必ずいとはせ給ふ様、

御壽命祈り奉る旨、

残す言葉の末に置く、

さとすに似たる鐘の音は、

早や小夜すぎと赤垣が、

ほろりと零す玉鉢の、

赤垣源藏

身寄浮雲滄海東

看花對月無限恨

久誤恩義世塵常

散爲曉天草木風

宗徒の武士に後れじと、

雪を蹴立て一筋に、

岩をも徹す桑の弓……

山越『ひき明け方や月代の、

中を命の捨て所』

地語消ゆるに似たる命かも、

天よ川よと押寄せて、

大干心も黒き炭部屋の、

中干内に隠れし吉良義兵衛を、

吹雪の中に引据えて……

四十七士が尖刀を、

朱に染めたる韓紅

大干花咲く春の心地して、

中干天地にひやく凱歌の、

夏『聲かあらぬか今の世に、

語り傳へて武士の、

鑑とこそは仰がるれ』合……

人は朽ても消えぬ名の、

切榮へ行くこそ雄々しけれ、

榮へ行くこそ雄々しけれ、

常陸丸

地語征露の軍やうくくに、

進み進みて南山の、

嶮岨も既に打やぶり、

音に聞えし要害の、

常陸丸

常陸丸

旅順港も閉塞し、

君が稜威の旗風に、

大干時しも頃は明治三十有七年、

玄海灘の只中に、

旗翻へす常陸丸、

春『船路はなれて白波の、

何を荒ぶる荒潮の、

只一筋に走り来て、

地語 鷺の棲むてふ滿洲も、

中干今は靡かぬ草もなし合……

しかも水無月中の五日、

夏『吹く朝風に日の丸の、

佐渡も續いて進み行く』合……

寄る邊は如何に遠からん』合……

逆巻く中に黒烟

我を取巻く敵の艦。

中干 ことは何事と言ふ間なく、

進み遁れん隙もなし、

中干 水に入りては如何にせん、

波には翼折れぬべし。

中干 運送船の悲しさに、

地語 詮方なくも敵艦に、

佐渡は如何にと眺むれば、

同じ様なる運の末、

常陸丸

亂射亂撃雨あられ合……

大干 千里を走る猛獸も、

萬里を翔る 鵬も、

心ばかりは逸れども、

地語 進退爰にきはまりて、

任せはてしぞ是非もなし合……

霧に隔りわかねども、

輸送指揮官須知中佐、

常陸丸

是迄なりとや思ひけん、

中干

聯隊旗をば手に取りて、

火を放ちて焼きたれば、

貴重きいようの品しなをぞ焼捨やきすてける 合

中佐は軍刀逆手に握り、

腹かき切つてぞ失うせにける。

同じ枕まくらに伏ふしにけり。

甲板てうきの上うへは屍かばねの山やま、

地語

大久保少尉の捧げたる、

都の方を伏しおがみ、

各將校もとりぐに、

此有様このありさまを打見うちみつゝ、

無念の齒がみ凄すさましく、

連なる將校下士卒も、

大干 此時敵彈このときてきだんますく加くははれば、

流るゝ血汐ちしほに玄海げんかいの、

中干

波なみはあけにぞ變へんじける 合

潮うしほの泡あはと消きえて行く、

夕陽ゆうひは浪なみにおちざれど、

あやめも分わかぬばかりなり。

駒こまのひづめに満洲まんしゅうを、

春『ウラルパイカル打越うちこへて、

思おもへば無念むねんの極きわみなり』

中干 國くにに盡つくせし大丈夫まさらの、

君萬歳きみまんざいの聲こゑほそく、

大干 アハレ果敢はかなき常陸丸ひたちまる、

霧立きりたちおほふ海うみの上うへ、

あゝ一聯隊れんたいの我勇士わがゆうし、

踏ふみにじらぬも夢ゆめなれや 合

あらまし事もまぼろしか、

水漬屍みづくかばねと消きえしかど、

夏『清きよき其名そのなは萬代よろづよも、

常陸丸

錦の御旗

響の灘に立つなみの、

切末まで遠く流るらん、

絶ゆる時なく仰がれて』

末まで遠く流るらん。

錦の御旗

(上段)

天照す日の影映る、

眞名井の流れ末清き、

地語

地語

瑞穂の國は昔より、
儲も元弘元年の頃かとよ、

武勇忠義の人多く、
後醍醐帝の三の皇子、

大塔の宮二品親王は、

南都の般若寺に忍ばせ給ひて

中干

御供の人々には、

熊野を指して落ち給ふ。

光林房玄尊 ……

木寺の相模岡本三河房、
平賀三郎矢田彦七、

地語

片岡八郎武藏坊、

彼是以上九人なり ……

大干

村上彦四郎義光、

柿の衣に笈を掛け、

宮をはじめ奉り、

地語

錦の御旗

錦の御旗

兜巾眉深に被りて、

熊野詣によそほひたり。

華軒香車を出まさぬ、

長途如何にと思ひしに、

社々の御禱り、

露も怠り給はねば、

地語 見とがむる事なかりけり。

夏 『沖ゆく舟の楫を絶え、

先達に作り山伏の、

中干 龍樓鳳闕に人となり、

雲上人の御歩行は、

地語 草臥れ給ふ御氣色もなく、合

宿りくくの御つとめ、

勤修を務むる先達も、

中干 由良の港を見渡せば、

浦の濱ゆふ幾重とも、

錦の御旗

しらぬ波路に鳴く千鳥』合

うす紫の藤代の、

大干 和歌吹上げを外に見て、

山越 『光も今はさらでだに』

地語 心を碎く習ひなるに、

冬 『夕を送る遠寺の鐘、

切目の王子に着き給ふ』合

中干 朝家の榮へを通夜ら、

春 『紀の路の遠山渺々と、

松にかゝれる磯の波』合

露 『月に磨ける玉津島』

地語 長汀曲浦の旅の道、

雨を含める孤村の柳。

哀を催す黄昏に、

叢祠に袖をかたしきて、

祈り申させ給ひける、

錦の御旗

地語

宮の御心推しはかり、
斯て十津川の戸の竹原に、
此處にも長くありかねて、
高野の方へと落ち給ふ。

皆々袖をぞ濡しけり合……

たよりて暫し居給へど、

切 高野の方へと落ち給ふ、

錦の御旗

(下段)

地語

茲に妹加瀬庄司とて、
宮をさへぎり申す様、

賊の一味の侍の、

此道通しなば、

錦の御旗

地語

鎌倉よりぞ罪せられむ合……
いかにも畏れ多ければ、
左なくば一人の御供を、
股肱の臣を一人だに、
詮方なくも御旗を、
僅かに遁れ給ひけり。
草鞋の緒や切にけん、
宮に追付申さんと、

中干

さはいへ宮に弓引くは、
錦の御旗賜るか、
止めて證據にせんといふ合……
いかでか残し給ふべき、
彼に與へて虎の口、
斯る所に村上彦四郎義光は、
遙に後れたりしかば、
足疾く過ぐる折しもあれ、

錦の御旗

庄司に碯と行逢へり合……

中干

正しく錦の御旗なり、

下撲が持てる旗見れば、
不思議に思ひ尋ねれば、

事云々と答ふるに、

義光これを聞きも敢ず、

くわつと怒りて打にらみ合……

中干

恭しくも畏くも、

四海の主は如何に何事ぞ、
追討あらん其爲に、

天子の御子朝敵を、

汝等如き下郎輩、

地語

御門出ある道にして、

持たる御旗を奪ひ取り、

かゝる舉動すべきかと、

錦の御旗

大の男を搔擾み、

四五丈許り投たるは、

獅子の荒しに異ならず合……

中干

妹加瀬庄司一言も、

此怪力に恐れけむ、
半句も無くてすゝみけり合……

義光御旗を肩に懸け、

程なく宮に追着きて、

地語

御前にひれふし事の由、

地語

具に申上しかば、

宮は喜び古の、

北宮勳が勇氣にも、

たち増れりとめでましぬ合……

中干

吉野の奥の戦に、

其のみならず義光は、
宮に代りて討死し、

備後三郎

夏『御旗にうちたる日月の、

光あらしそふ忠臣の、

義士とたゝへて萬代も』合

君に仕ふる人臣の、

切鑑とこそは仰がるれ、

鑑とこそは仰がるれ、

備後三郎

元弘二年春の末、

花に厭ひし世の風も、

畏きほとりに吹き荒び

恐多くも萬乗の、

皇帝をはるぐと、

波路へだつる隠岐國に、

遷し奉らん事の由、

はや隠れなく聞えけり合

大干 爰に備後三郎高德は、

中干 義を見て勇む人々と、

勵し語ひ鳳輦を、

嶮岨に要して奪はんと、

地語 船坂山に向ひしに合

警固の武士共今宿より、

山陰道に道を替へ、

遷幸なし奉りしと、

聞いて何れも顔見合せ、

中干 さらば是より筋違に、

山また山を攀ぢ越へて、

武運の程を美作や、

地語 急げや急げと走りゆく合

思ひし事はあぢきなや、

備後三郎

備後三郎

春『いすかの角のはしなくも、

鸞輿は早も杉坂の、

かゝりしければ同志の面々、

大干 皆ちりぐに失せければ、

折だにあらば赤心を、

大干 叡慮を安じ奉らんと、

穂にこそ見えね荒すゝき、

忍び寄りたる折もよし、

再びこゝに行違ひ、

院の庄へと入らせ給ひけり』合

力も意地もくぢけつゝ、

中干 獨り勤王無二の高徳は、

天津空まで聞え上げ、

そは降る雨にたより得て、

一重の蓑に身をやつし、

冬『衛士のたく火もほの暗く、

備後三郎

警備おこたる垣の外に、

是れ屈竟と肯き寄り 合

採るや墨汁の速かさ。

十字の唐詩書きしめす 合

天莫空勾賤

時非無范蠡

地語

斯なん認め莞爾と笑み、

御座所の方を拜し奉り 合

餘人に後れは取り奉らず、

一本繁れる老木の櫻』

幹を削りて武士の、

赤き心をくろぐと、

大地に挫と平伏して、

微心高德報國の丹心、

さは言へ獨力空拳にして、

備後三郎

回天の大御業にも、

中千 微塵しるしは建がたし、

地語

あはれ孤忠を哀れと見まし給はれと、心のうちに奏上し、

悄然として立ち去りけり

合 大千程なく明くる東雲に、

中千

彼の唐詩の由聞し召し給ひ、

龍顔いともうるはしく、

地語

拜し奉るぞありがたき。

中千 嗚呼身は下ながら嬉しけれ、

大千

そこと知られぬ夕露と、

春 『消にし後も香ばしき、

いさをの花は永久に、

咲きて榮ゆる櫻の宮』

いつき奉りて敷島の、

大和ごゝろの龜鑑とて、

切譽れは世々に残るらむ、

譽れは世々に残るらむ。

静御前

(上段)

おもひぞいづる唐土の、

七歩の詩だに悲しきを、

況てやこれは日本の、

ほまれも高き源の、

地語

流れの末といひながら、

地語 濁る言葉のさかしらに、

枝断ち折らばおのづから、

幹もや枯れんあさましの、

浮世にくねる女郎花、

中千 それしも茹るか鎌倉の、

静御前

静御前

星の光はうすれけり合……

さびしき仰蒙りて、

北白河のほとりにて、

静御前を尋ね出し、

なさけ容赦もあらし吹く、

引立て行くぞ無慚なる合……

如月中旬の朝まだき、

雁の音信まつざかも、

さても此度鎌倉殿の、

地語 北條四郎時政は、

地語 判官殿のおもひもの、

母の禪師ともろともに、

上見ぬ鷺の一とつかみ、

中干 時しも頃は文治二年、

夏 『星影さえぬ粟田口、

空しくすぎて走井や』合……

春 『また何時しかも逢坂の、

打出の濱に鳴く千鳥』合……

中干 野路の篠原忍ばれて、

うつる膽吹の嶽影も、

野暮れ山暮れ草まくら、

着つゝもなれぬ玉鉾の、

鎌倉山にぞ着き給ふ合……

都こひしや君戀ひし、

これやこの世の關守か、

大干 勢田の唐橋打ち渡り、

冬 『涙にくもるかゝみ山、

雲間に隠れ跡もなし』合……

はるくく來ぬる旅ごろも、

道に日数を重ねきて、

地語 いづこを見るも涙の種、

中干 去年の霜月別れてし、

静御前

靜御前

吉野の深雪いかならむ、

地語 ふみ分け入りし人の跡、

地語

慕ふこゝろぞ哀れなる、合

扱ても悼はしや靜御前、

鎌倉殿の仰にて、

屠所の羊のなよくと、

冬『歩みもあへぬ足曳の、

山鳥の尾の長局、

ひかれて御前に出で給ふ』合

中干

此時右大將頼朝は、

御簾高らかに上げさせて、

靜御前に打ちむかひ、

地語

誠に汝は吉野までも、

地語

九郎に従ひし者なれば、

かならず行衛知りつらむ、

つゝまず申せと仰ける。

靜御前

中干

靜は臆する氣色なく、合

判官殿のおんゆくる、

地語

妾は一の華表まで、

それより奥は掟にて、

名残惜めど詮方も、

日毎に念ずる神佛、……

中干

早く御歸洛あれかしと、

唯なつかしき我君の、

地語

君に隨ひまつりしも、

女の入るを許さねば、

なくなぐ都に立ち歸り、

大干

御中睦敷ならせられ、

祈り暮し、折なれば、

幸ある御使きかんと、

靜御前

わづかの望を樂みに、

冬『あとは岩間の山つゝじ、

最ともあはれに聞えけり』合

一とよ二よと過ぎけるが、

梶原平三景時は、

地語

あはれ天下に隠れなき、

上覽あらせんとの御誼なり、

いとおごそかに申けり 合

遙々下り來りしを。

あかき心けあらはれて、

斯くて其日もくれ竹の、

鎌倉殿の御使として、

磯の禪師を訪づれて、

地語

靜御前の舞曲をば、

此のよし傳へ給はれと、

中干

靜御前は仰を聞き、

靜御前

地語

そは思ひも寄らぬ御事かな、

御許もなくよそびとの、

尙ほ此程は心地あしく、

いなみ申して歸させければ、

秋『よろづにひかぬ梶原も、

心はひかんよしもなく』

歸り行くこそ笑止なれ。

地語

判官殿に仕へ申してより、

前に舞ひたる事あらず、

起居もまゝならねば迎、

梶原面目をぞ失ひける。

根ざしもかたき姫松の、

歸り行くこそ笑止なれ、

靜御前

靜御前

(下段)

去る程に磯の禪師は、

はした者に鼓打たせ、

地語 かぞへてぞ舞ひたりける、合

神の御前にかしづきて、

地語 人のふるまひ幕の引様、

御參詣とさとりしかば、

都よりつれ下りつる、

先づ一番の白拍子を、

かゝりける間に靜御前、

暫し祈念し居給ひしが、

いかさま鎌倉殿の、

扱は賺されたりと悔多、合

地語

あはれなんともして、

祐經の妻女を呼び給ひ、

此度は御不審の身にて、

鼓打も召連れ候はず、

わらはは復た報賽しに

態と下りて舞ひ申さんと、

中干

大名小名これを見て、

地語

頼朝公もきこしめされ、

靜御前

地語

今日の舞をのがれんと、

鎌倉殿も御參詣と覺候

召し下され候に依り、

されば今母なる人の法樂せられ候上は

つゝみ打の用意して、

やがて立んず氣色なれば、

皆興さめてぞ居たりける、合

世間せばきことかな、

静御前

鎌倉にて舞せんとしつるに、

鼓打なきため舞はざりしと。

聞えん事こそ恥しけれ、

中干 早く楽黨を撰めと仰けり合

大干 嵐になる、深山にも、

春 『松のしらべはあるものを、

あら浪よする磯にだに、

鼓の音やひらくらむ』合

秋 『弓矢にすさむ武士逆も、

世の憂き節ぞ知りぬべし』合

中干 さて舞の役人は誰々ぞ、

鼓には工藤左衛門祐經、

鐘は梶原平三景時、

時の調子の笛の役は、

畠山次郎重忠と註されたり

合 大干 程なく祐經舞臺に上り、

中干 上の松山廻廊の、

天井高く響かせつゝ、

手色打鳴らし待つ所に、

梶原祐經の座になをり、

鼓に従ひしらべを合せ

次の樂黨を待ちかけたり合

地語

畠山は漢竹の葉調を持ち、

祐經が左の方に居直れば、

静御前此有様を見給ひて、

地語 今は不足もなかるべし、

中干

いざ一さしと立ちあがる、

夏 『姿にちなむ鶴が岡、

雲井戀しき音あやなく』合

春 『露にしをるゝ羽衣の、

袖のみ軽くなびけども、

ひるがへらぬは心なり』合

静御前

靜御前

大千

皆みなくれなるの扇あふぎには、
割菱縫わりびしぬひたる水干すゐかんに、

たけの黒髪くろかみたからかに、

冬『夢ゆめにもそれと三保みほの浦うら、

霞かすみのひまにたなびきつ』合

初音はつねゆかしき鶯うぐひすの、

今いまや神無上しんむじやうの一曲いっきよくをば、

地語 祐經すけつね心なしとや思おもひけむ

中干

深ふかきまことの色いろを見せ、
白しろき袴はかまをふみしだき、

結ゆひ上げ謠うたふ面影おもかげは、

天津あまつ乙女おとめの舞まひの裳すそ、

大千 そことも知らぬうるはしの、

春はるつげわたる如ごとくなり。

なから許ばかりかぞへけるに、

やがてせめをぞ打うちければ、

靜御前

靜しづかは君きみが代よを謠うたひ上あげにけり 合

あなら情なさけなの祐經すけつねかな、

舞まはなんものを如何いかにせむ、

雲くもの通かよひ路ぢ吹ふきとちよと、

此時このとき靜御前しづかごぜん思おもふ様やう、

判官殿はうぐわんだんの御爲おんためにも、

飛とぶ鳥とり落おとす鎌倉殿かまくらどのの、

ひとしほ聲こゑを張はりあ上げて、

地語 並居ならひる人々ひとびと之これを聞き、

せめだに打うたずば一折ひとわりを、

山越やまこへ『尙なほしばしだに天津風あまつかぜ、

祈いのらぬ者ものこそなかりけれ』合

地語 詮せんずる所敵前ところてきぜんの舞まひなれば、

思おもふ事ことを謠うたは、やと、

御前ごぜんも憚はにかる景色しきなく、

静御前

賤やしづ賤の苧環繰返し

むかしを今になすよしもがな合……

秋『繰返しつる言の葉の、

露の玉の緒いのちまで、

かけてぞ願ふゆふだすき』

地語いと雄々しくも舞納めり。

中干さしにもに猛き鎌倉武士も、

かよはき女の一と節に、

骨節までも碎かれて、

唯しづまりて居たりける合……

地語實にや静御前の粧は、

中干朝日に匂ふ敷島の、

大和心の人の花、

幾萬代の末までも、

切みさをの鏡に映るらむ、

操の鑑と仰がるらむ、

臺灣入

皇の御稜威は四方に輝きて、

地語清國遂に和議を請ひ、

地語臺灣島を献上し、

合戦こゝに始まれる、

君の御代こそ目出度けれ合

大干臺灣島の土賊ども、

中干龍車に向ふ蟪蛄の、

斧を揮ふと聞えしかば、

征討の師をぞ遣はさる合……

大干近衛兵の精銳を、

臺灣入

臺灣入

率ひきひて御渡海ごとかいめされしは、

中干 北きた白川しらかはの宮みやとて、

三貂角せうかくの御上陸ごじやうりく、

大干 木きを削りけづてぞ印しるさるゝ

三貂大嶺せうたいれいの嶮岨けんそをも、

地語

大雨だいう頻しきりに降ふる時ときも、
士率しそつ之これに感激かんげきし、

命いのちを惜をしまず進軍しんぐんす 合……

陸軍中將りくぐんちゆうじやう大勳位だいくんゐ、

金枝玉葉きんしきよくえうの御身おんみなり。

幕營ぼくえいありし其跡そのあとに、

中干 炎熱えんねつ燦さんくが如ごとき日ひに、

地語 馬うまにも召めさず越こへ給たまひ、

夏 『濡ぬれにぞ濡ぬれて進すすませらる

病兵びやうへいさへも立上たちあがり』

中干 所々しよしよの砦とりでに籠こもりたる、

大干

賊兵ぞくへい共どもの撃出うちだす彈丸だんぐわんは、
降ふり注そぐが如ごとくにて 合……

百雷ひやくらい齊いしく落おつるに似にたり。

突貫とつくわんせよと下知げちあれば、

勇いさみ立たつたる近衛兵このゑへい、

中干

賊ぞくの巢窟さうくわに突つて入いる 合……
右往左往うわうさわうに逃にげ散ちりて、

旭 『大砲小銃たいはうせうじゆうの戦利品せんりひん、

臺灣入

雨あめか霰あられか白雪しらゆきの、

砲烟はうえん暗くらく天てんを蔽おほひ、

宮みやは矢石しせきを冒おかしつつ、

川村少將かわむらせうじやう小島大佐こじまたいさを初はじめとし

我われ先さきにと奮進ふんしんし、

大干

賊兵ぞくへい之これに氣きを吞のまれ、
降參かうさんする者もの數かず知しれず。

山やまを築きづかん許ばかりにて、

臺灣入

勝鬨ドツと揚ければ』

基隆城へぞ入らせ給ふ合

臺北城を陥れ、

翌る八月には、

十月の初めつかた、

天熱くして瘴癘多く、

千辛萬苦の其中に、

晝は汗馬に鞭を揚げ、

地語 宮は此時悠々として、

斯くて六月十日には、

七月新竹を占領し、

彰化臺中兩廳を定め、

臺南さしてぞ進まるゝ。

地險くして糧道絶え、

宮は士率と食を分かち、

夜は荒野に露營して合

臺灣入

月を戎衣の袖に宿し、
平定の策をめぐらし給ふ。

竹の園生の御身にて、

中干 遂に御病に罹らせ給ふ、

御供の人々打ち驚き、

中干 切に御諫め申せども、

吾れ官軍の將として合

たとへ臺灣の土となればとて、

唯國の爲め君の爲め、
御痛はしや悲しやな、

大千 餘りに艱苦を積ませられ、

日々に重らせ給ふにぞ、

都へ歸らせ給ふやう、

宮はいつかな聞こし召さず、

地語 賊徒平定を見ぬ内は、

吾のみ士率を打捨て、

臺灣入

いかで都に歸らるべきと合……

驕に召されて進ませらる。

御臨終の其際に、

賊徒平定と聞召し、

宮はにつこと打笑み給ひ、

萬歳と唯一聲、

宣ひしばかりにて、

敢なく薨去なし給ふ合……

傳へ聞く日本武士の故事を、

今日の前に見參らせ、

國中の民も兵も慟哭せぬはなかりけり大干

去乍ら昨日今日とは思はねど

老少不定に貴賤なし、

唯人は名こそ惜けれ、

地語 皆人は名を千歳に残せかし、

臺北悠悠々仁政成
旭光將被臺南地

皇軍到處湧歡聲
殲彼巨魁安萬生

大干

宮の歌ひ給ひし如く、

中干

盛功偉烈後の世に、

輝き渡るぞ有難き、

北白川の水はゆきて歸らねど

月影ながく澄み渡り、

切 光は代々に流るらむ、

光は世々に流るらむ。

海洋島

地語 我日の本は往古より、

仁義に厚き國なれば、

海洋島

海洋島

弱きを見ても侮らず、

隣國の交誼によりて、

支那の暴慢を怒し給はんと、

畏多くも大轟を、

爰に陸戦は牙山に開かれ、

浪花の砲門の開きしより、

未だ雌雄を決すべきの、

唯焦躁くぞ思はれける

強きに會ふも恐れなし、

朝鮮の獨立を扶助し、

今上皇帝陛下には、

廣島に進めさせ給ひける

海戦は豊島沖に、

海陸共に打進みしが、

機會あらざるを、

頃(〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇)は明治二十有七年、

海洋島

中干 菊月中の七日の曙に、

夏 『橋立浪花高千穂等、

舳艦列ねて乗り出す』合……

疾く撃ち碎かんづと、

地語 巳の刻少し下りし頃、

中干 棚引くが如く見えければ、

あれこそ紛ふ方なき黒烟、

開戦用意の號令は、

我が艦隊は松島を旗艦とし、

大小合せて十一艘、

敵は何處に潜むらん、

偵察怠りなかりしが、

遙か向ふにうすぐもの、

中干 上下こそつて雀躍し合……

待ちに待ちたる敵の艦、

全艦隊に鳴りひびけり。

海洋島

秋『千年をいはふ松島や、

實に日の本の三つの景』合

かをりも高き高千穂の、

大干更に此方をながむれば、

夏『朝日に匂ふ秋津洲、

千代田にもゆる民草や』合

比叡の山影うつるらん。

單縦形に居ならびて、

天の橋立いつくしま、

春『咲くや此花浪花津に、

雲にそびゆる景色なり』合

中干吉野の山のさくら花、

扶桑國てふ名にめでよ、

みどりを敷ける鴉の湖、

斯て二手に立ち別れ、

國威を示す日の御旗、

大干

高く帆柱にかゝげつゝ、

此時敵も雁行に陣を備へ、

其他の朦朧を翼に張り、

霧地に寄りすゝみ、

地語 されど我は之に應せず、

一度に放つ速射砲、

潮は高くほとばしり、

波はともえの渦を巻き、

海洋島

用意とゝのへ進みゆく合

定遠鎮遠を中堅とし、

我艦隊を突かんとて、

はや大砲を打掛けたり合

次第に敵に乗り近き、

百雷の空に轟く如くにて、

湧も返らんばかりなり合

空は煙に掩はるゝ、

海洋島

撃ちつ撃たれつ敵味方

果しも今はしら浪を

勇みに勇む我軍は

しばし戦ふそのうちに

續いて定遠致遠を撃破れば

中干

敵も味方も是れを見て

去る程に敵の艦隊は

唯チリ／＼に失せければ

追つ追れつ巡りつ

蹴立て走る軍艦

敵を中央に引つゝみ

先づ超勇を撃ちしづめ

眞逆様に千尋の底に沈みけり

関の聲をぞ合せける

冬『風にみだるゝ紅葉々の

さすがの定遠鎮遠も』

地語

はや浮足になり果て

我は穢し返せと追継りしが

残る日影は波に映じ

かかる所へ旗艦より

残念ながら敵艦を見逃して

夏『我艦隊は整列し

全軍凱歌をあげにけり』

高千穂艦の帆ばしらに

海洋島

血路を索め逃げんとす

此時日は西山に傾きて

血汐の海とも見えにける

引揚の號令ありければ

海洋島の沖中に

軍旗閃めく甲板に

折しも一羽の鷹飛來り

とまりて呼ばふ一聲は

海洋島

神が下し、ほぎ事と、

地語 すめらみくにの旗風に、

支那の北洋艦隊も、

我海軍の大勝利、

秋 『名譽はいと永久に、

千代萬代もかざるらん』合……

切 尊き御稜威と仰がれける、

感せぬ者こそなかりけれ。

いかで及向ふ敵やある合……

こゝに殆んど全滅し、

世界果にも知渡り、

末の松山末かけて、

是ぞ今上皇帝陛下の、

畏き御稜威と仰がれける。

粟津ヶ原

(上段)

楚の項王が面影を、

日の本一の猛將と、

大千 朝日將軍義仲は、

地語 暴れにそがれし如くにて、

中千 只一と息に粟殻の、

夏 『昔戀ひしき白旗を、

粟津ヶ原

寫して茲に比ぶべき、

未代までも唄はれし、

大千 木曾の深山の暴れ猪の、

中千 名に負ふ寄手の十萬騎。

地語 谷に蹴込めと進み立ち合……

比叡山嵐に翻へし』合……

粟津ヶ原

汝に逢はん願ひにて、

日頃のちぎり空しからず、

大干

我本懐に叶ふたり、

三途の川も駒立てゝ、

地語

申し給へば兼平は、

太干

コハ情けなき仰せかな合

中干

皆武夫の弓矢の常にて候へば、

再擧を計り給へかし。

斯くは耻辱を忍びしぞ。

主従爰に出面ひしは、

いざ諸共に刺し違へ、

地語

いと面白く越さばやと、

涙の顔を振り仰ぎ、

中干

負くるも勝つも戦場の習はせ

こゝを落ち延び時を見て、

兼平つらく世の有様を觀するに、

平家は正に西にあり、

太干

我北國の草木は、

地語

靡かぬものも候はず。

地語

天下を取つたる君も在り、

中干

大將の旗押立てゝ、

春

『われても末に逢はんとぞ、

暫しが程は忍びしが』合

中干

木蔭山蔭遠近より、

中干

佐殿東に在ませど、

地語

固より君の旗風に、

地語

七十二度の敗け軍に、

心弱くては叶ふまじと、

四方を屹度 靡けば、

いさめる言葉に従ひて、

大干

同じ流れの四五百騎、

地語

集まり來るぞ頼もしき。

粟津ヶ原

粟津ヶ原

大干

主従是れに力を得て、
心死を期せし圓陣は、

中干

蒲の冠者が率ひたる、
呐どオメきて押掛ける、

中干切

阿修羅王が荒れたるも、
いと凄まじき次第なり合

粟津ヶ原

(下段)

地語

此機を外さず切り込めと、
只鐵丸の如くにて、

地語

一萬餘騎の只だ中に、

秋

『北國武士が一期の武勇、
斯くやと計り思はれて』合
いと凄まじき次第なり。

地語

偕ても木曾殿主従は、

地語

眞只中に切つて入り、

地語

敵の色めく呼吸を計り、

さしにも猛き北國武士も、

鐵石ならぬ身のつらさ、

或は手を負ひ討死し、

哀れと云ふも哀れなり。

中干

武運の末と悟りてか、

粟津ヶ原

地語

雲霞の如き大敵の、

地語

七度八度馳け惱やまし、

中干

颯と引き揚げ給ひしが。

數日に亘る激戦に、

新手の敵に攻められて、

残るは主従只二人、

此有様に木曾殿も、

大干

ヤヲラ兼平を見返りて、

栗津ヶ原

中干 日頃着押れし物具の、
弓矢の神の加護も絶へ、
今ぞ最後の時ならめ。

地語 兼平聲も打震ひ、

大干 日頃數萬の軍勢を、

地語 今は續かん兵もなく、

地語 成果て給ひし故を以て、

地語 さこそは覺へ給ふらむ。

中干 今日不思議に重かるぞ、
我精力も盡きたれば、

用意せよとありければ合

大干 御痛はしや我君には、

中干 左右に従へ給ひしも、

地語 匹馬單騎の落武者と、

中干 氣の弱きには力も抜け、

大干 さはさりながら兼平が、

中干 かくて御供仕まつれば、

中干 多くつれても何かせん、

中干 千萬騎とも思し召し、

中干 落ちさせ給へと諫めしは、

中干 眞心こめし血の叫び、

中干 されども追手の若式者は、

中干 功名せむと競ひつゝ、

中干 最早遁れん路もなし。

栗津ヶ原

地語 雑兵どもの數ばかり、

中干 此の兼平が一人を、

中干 兎にも角にも此場をば、

中干 夏『實に鐵石の大丈夫が、

中干 涙の響きと聞えけり』合

中干 木曾殿討つて第一の、

中干 追ひ來る勢烈しくして、

中干 兼平屹度聲を掛け、

粟津ヶ原

將軍號を賜はりし、

中干 馬蹄の塵に亡き後の

地語 彼處なる丘の森蔭にて、

地語 兼平爰に留まりて、

地語 箴に残る八筋の矢、

八騎計りを矢繼早に射て落し、

袖も兜もかなぐり捨て、

草の葉末におく露の合……

大干 君の御身はいと尊し、

中干 耻晒さんは口惜し、

地語 心静かに御最後あれ。

地語 暫しの防矢仕らむと、

地語 引き抜き引き抜き發矢くくと

箭種つきれば物の具の、

打物取つて戦ひつ。

冬『乾くも待たで自己から、

粟津ヶ原

玉と碎けん命もて、

祈る心ぞ健氣なれ。

中干 唎とあげたる鯨波、

呼ばはる聲の聞へければ、

大干 一期の大音張り上げて、

大干 近くば寄つて目にも見よ、

四天王の随一と呼ばれたる、

主君の御跡追ひ参らせて、

君の最後の安かれと合……

地語 斯る處に敵陣より、

早や木曾殿を討ちしぞと、

兼平今は是迄ぞと、

大干 遠からん者は音にも聞け、

我は木曾殿の身内にて、

今井の四郎兼平なり。

武士の手本を示すなり、

粟津ヶ原

一世の嗜み後の世迄もの語り草、見覺へ置けや東八ヶ國、

春『若殿原と叫びもあへず、

筋切打つて眞逆様』合

太刀先口に啣みて鞍坪より、

大地に控と落ちにけり合

大干

天晴れ無双の忠臣も、

大干

主君と共に盛りなる、

中干

三十七の傲骨を、

地語

空しく爰に曝らしけり。

秋

『哀れ粟津の原寂びて、

地語

弔ふ人も稀なれど、

武

道を愛する神々の』

春

『手向けの花の名なし草、

四季折々に咲き盛かる、

色香目出度き其花に』合

弓矢の譽れ留めたる、

名将勇士の物語り、

いと尊くも聞へけり、

いと尊くも聞へけり。

盆栽樹

駒を駐めて敷妙の、

袖うち拂ふ影もなし、

佐野のわたりの雪の暮、

佐野のわたりの雪の暮、

雪似鵝毛飛散亂

人着鶴裳立徘徊

其れに見えさせ給ふは、

此家の主人に候はずや。

盆栽樹

盆栽樹

地語

我、は、一、處、不、住、の、
この雪暮に道迷ひ、

地語

雲水の身にて候が、
最ど困じて候ほどに、

地語

あはれ一夜の宿りをば、
主人はいと、耻らひて、
種ならんとは思へども、

御宿申さば善根の、
賤が伏家の詫住ひ、

地語

召し給ふべき夕餉とて、
御宿の事は難からん合
見苦しけれど一夜をば、

夜のしとねも持たぬ身は、
さは言へ忍んで給はらば、
明し給へと申しける合

盆栽樹

大干

旅僧は喜び内に入り、
夕餉も淡き粟の飯の、

夏

草鞋解ぎすて座に直り、
『あはき浮世に暮せども、
響應振ぞ殊勝なる』合

中干

實にや浮世は彼の郡鄂、
今は侘しき此の住ひ。

慮生が夢と盡果て、
松吹く風や野邊の霜、

地語

降りにし夜半はよもすがら、
何思出のあるべきと、
小笹の上に積む雪の、

寝られねば夢も見ず合
話す話の長ければ、
落ち来る聲もいと冴て、

盆栽樹

大千

夜もしみじみと更渡り、
薪も盡きて消えくの、

譬へんものもなかりけり合……

庭の方へと立出しが、

梅松櫻の三種にて』

地語

今の有様凌ぎなば、

中干

松は常磐の深みどり、

誓ふ心のためしをば、

中干

焚きて寒さを防ぐべき、
此家の内の哀れさは、

何思ひけん主人には、

冬

『携へ來ぬる鉢の木は、

梅は艱苦に耐るなる、

『花咲く春のあらんかと合……

零落たれども變らじと、

夏

『花は櫻に人は武士、

地語

心の誠切りて焚く、

如何に主人よ御苗字を、

主人は形容改めて、

源左衛門尉常世が、

一族共に領地をば押領せられ、

とは云ふものゝ今爰に、

拗断たれども具足一領。

先づ一番に馳せ参じ、

盆栽樹

旅僧は深く感に堪え』合……

名乗り給へとありければ、

某こそは佐野の、

なれの果にて候が、

茲に浮世の假住ひ合……

疲れたりとも馬一疋、

スワ鎌倉と聞くならば、

思ふ敵と引組んで、

盆栽樹

討死なさん身の覺悟合……

たとへ飢とも死ぬまじと、

秋『話も盡きて曉の鐘、

踏みて別れを旅の僧』

銀花繚亂朔風寒

斯て月日も經つ程に、

鎧兜に身を固め、

大千 中に常世は只一人、

先づ夫迄は我命合

心に誓ひ侍るぞと。

共に名残も残る雪、

何處を的に歸るらん合……

遠近模糊省省

鎌倉よりの命ありて、

集りつとふ大小名合……

中干 瘦せたる馬に繩手綱、

衆に變りし粧ひにて、

爰に時の執權時頼入道、

地語 我は過にし雪の暮、

求めし旅の僧なるぞ。

言葉に違はぬ武士の道、

中干 されば常世が本領たる、

梅松櫻にゆかりある、

庄を合せて三十餘郷合……

盆栽樹

鎌倉さして馳せて行く合……

常世を御前に召されつゝ、

地語 汝が家に宿りをば、

其時汝が誓ひたる、

いかで報はで叶ふべき合……

佐野の庄の其外に、

梅田松々枝櫻井の、

子々孫々に賜ふにぞ、

武林唯七

常世は御教書押頂き、
 繩の手綱に引替て、
 駒のあがきを早めつゝ、
 切 武士の様こそ目出度けれ、

竹林唯七

君に其身を捧ぐれば、
 孝に心を委ぬれば、

春 『再び花咲く優曇華や、

古郷に飾る綾錦』合……
 本領さしてぞ歸りける、
 武士の様こそ目出度けれ。

親に不孝の憾あり、
 君に不忠の恐あり。

地語

忠孝全からざるを、
 世の大方のかこつには、
 節慕はしき竹林

中干

赤穂の城主内匠頭、
 頃は元祿十四の春、
 吉良義央が亡状を、
 徳川幕府の殿中にて、
 地語 世にもいやけき落度にて、

武林唯七

地語

古よりの通患と、
 引も換たる吳竹の、
 唯七隆重と呼ばれしは、

浅野長矩の臣下なり合……
 内匠頭長矩は、

憤りたる短慮より、
 一刀斫付け給ひしが、
 公儀の沙汰は無残にも、

武林唯七

屠腹の命をぞ下しける合…
長矩殿を襦袢より、

地語

至悲斷腸の思ひにて、

絞りもあへぬ明け暮を、

孝心厚き遠慮より合…

病に罹り給はぬか、

大千

朝の嵐の出づさにも、
心置きつゝ今日と暮れ、

大千

唯七の母は乳母にて、
育て申せし事なれば、

老の袂の露しげく、

慰め兼し唯七が、

中干

若しや此儘母人の、
心や狂ひ給ふらむ。

夕の風の入さにも、

夏『明日と明けゆく折ふしに、

武林唯七

五月の空の月ならで、

憂ひの雲の絶間より、

唯七ひそかに喜びつ合…

弛む思に行春の、

地語

鳥の聲に覺されつ、
枕の下の韓紅。

中干

這は何故の御自害ぞ、
さしも丈夫の心にも、

最と珍らしき笑顔さへ』

地語

拜まるゝ節ありければ、
斯ては心安しとて、

地語

夢ばかりなる短夜を、
母の臥戸を伺へば、

唯七直と伏まろび、

喃母上と抱き起し、

一期の不覺はらくくと、

武林唯七

合 翻す泪の玉櫛笥……

地語

争で答へのあるべきぞ。

中干

もぬけの殻の側に、

涙に染めし鳥のあと、

死出や三途の御供せん、

地語

究天極地の御遺恨を、

御心ばせを察しなば、

中干

我身を捨て其子をば、

合 二聲三聲叫べども、

大干

六魂去て空蟬の、

今宵限りの命毛を、

地語

母は未來の殿様に、

本望達し給はずして、

吞で過去り給ひたる、

其覺悟こそありたけれ

合 勵まされたる健氣さに、

大干

唯七身も世もあらばこそ、

中干

我君のみか親をさへ、

思へば憎き吉良義央と、

鬼神もために泣きぬらむ。

闇の底より見出して、

高名随一と唱はれし、

花は散りても盡ぬ香の』合

世に匂ふこそ目出度けれ。

武林唯七

五臓を絞る血の涙

合 刃の錆となしつるよ……

純忠至孝の誠には、

中干 至誠の眼は義央を、

四十七士の其中に、

旭 『忠孝全き梅櫻、

世に匂ふこそ愛たけれ、

切 世に匂ふこそ愛たけれ、

扇の的

扇の的

壽永の春の矢島潟、

地語

十八日の日はたけて、

木神に鳴りし太刀音も、

中干

中に連なる兵船は、

旗ひるがへす平家方……

九郎判官義経を、

大干

笹龍膽を素絹に、

波風荒き衣更着や、

潮に響きし矢叫びも、

聴てぞ絶ゆる敵味方……

揚羽の蝶に紅の、

長汀曲浦の陸地には、

大將とする東猛者、

染めたる旗の幾ながれ、

扇の的

浦風牙へて吹きなびく……

渚の方へ漕ぎ寄する、

舳に掲げし軍扇は、

見るも眩ゆき風情あり……

大將始め訝かしみ、

船に眼を打ち注げば、

いとも目出度き上藤の、

是れ射よがしに磨く……

折もこそあれ徐々と、

地語

平家の船の唯一艘、

旭かたどる金の丸、

中干

陸にひかへし東軍は、

そも何事やなすらんと、

秋

『花の顔月の眉、

檜扇颯と打ち廣げ』

地語

義経片頬に笑み給ひ、

扇の的

都の人の習ひとて、

味方の手鍛錬誰ならん、

許多の人に推れつゝ、

下野の國の住人にて、

同苗與市宗高なり。

地語

彼れ射て見よと望まるゝ合

旭に弓を射向けんは、

日の丸避けて矢を放ち、

地語

大將近く座を與へ、

身の面目は澤なれど、

最も畏こき業ならん合

武運拙なく外れなば、

中干

身の榮辱は我知らず、

思へば心定まらず合

一徹短慮の御大將、

地語

されば與市宗高は、

逞しげなる黒馬に、

ゆらりと乗りは乗りしかど、

大干

兩軍固唾を呑み乍ら、

倘も過つ事あらば、

扇の的

源氏の軍の名折ぞと、

暫したゆたひ居しかども、

争で許させ給ふべき合

已むなく御説かしこみつ、

金覆輪の鞍置いて、

是れや生死の海ならん、

中干

眼を注ぎたる晴の場所合

其場を去らず死なんすと、

扇の的

一筋の矢に百年の、

健氣の覺悟を憫れなる合……

矢頃量りて控ゆれば、

夏『日影浸せし海の面、

立騒がする北の風』合

中干 或は低くまた高く、

地語 定め難きぞ恨みなる。

心の裏に祈るやう、

命を掛ける武士の意地、

馬を汀に打たせつゝ、

中干 時に夕陽かたむきて、

黄金をたむ浦浪を、

大干 船諸共に軍扇の、

右に左にゆらめきて、

地語 宗高馬上に眼を閉て、

中干 南無や八幡大菩薩、

大干

此浪風をうち静め、

南無や八幡大菩薩と、

天に通じて自づから、

射よげに見ゆる敵の的合……

扇の的

二荒權現那須野の湯泉大明神合……

願くばあの扇を射させ給へかし、これを射損ずる者ならば、

弓切り折つて自害して、

地語 人に再び面を向くべからず、

見給ふ慈悲のましまさば、

震しの守護を垂れ給へ、

秋『誠よりなる一心の、

風風ぎ浪も静まりつ』

宗高心を押し静め、

扇の的

矢を抜き取つて打つがひ、

地語

命をしぼる右手左手、

能く彎き堅め氣を呑んで、

鏢と放てば鏑矢の、

浦に響きて鳴く千鳥……

羽可く隙もあらばこそ、

中干

規ひ違はず扇轂をば、

發矢と射切つて矢は海に、

中干

扉は空にひるがへり合……

そよぐ嵐にひらくくと、

花か紅葉か入り残る、

落暉を映して一入の合……

眺め榮へある有様に、

敵も味方も感に堪へ、

舩たゝく一門に、

箴を鳴らす源氏方……

切

譽れきこゆる文の上、

實にも千古の武名なり。

矢島の浦を打つ浪の、

音諸共に宗高の、

暫しは鳴も止まざりし、

夫かあらぬか今も猶ほ』

吶と揚げたる鬨の聲、

大『山に響きて海も湧く、

太田道灌

抑も太田道灌と申しけるは、

資性剛毅勇敢にして、

少壯の時武に勵み、

文にうとくおはしゝも、

太田道灌

太田道灌

地語 築城の道に精しければ、

千代田寶田の地を相し、

今ぞかしこき大宮の、

いと譽れある業になん、

中干 城の經營おはりければ、

士卒引つれ道灌は、

さして行衛は白雲と、

競へる駒の心すら、

長祿元年武藏の國、

江戸城をぞ築かれける。

雲井の庭と仰がれて、

時しも頃は春の末、

勇む駿馬に跨りつ、

鷹野にこそは出でにけり、

夏 『まごふばかりの櫻田や、

たなびかれぬる霞が關』

太田道灌

春 『月毛の色もおぼろにて、

萌ゆる巷の春風に』

中干 なびく緑の亂れ髪、

菫蒲公かほる野に、

夏 『影は何所に遠近の、

士卒にはぐれ道灌は、

折しも起る雨雲に、

一むら茂る森を目指し、

ひづめに匂ふ若草の、

けふる柳のいとまなく、

いふすべもなき眺めかな。

心も空に鳴く雲雀、

たつきも知らぬ原中に』

夏 『一人さまよひ居たりけり』

心せかれて道灌は、

駒を早やめて進みしが、

太田道灌

はや降りかゝる春雨は、

そゞぐ涙と知られけり。

地語

誰れ松風に琴の音も合……

地語

花を惜みしみやびをの、

漸く森に近づけば、

中干

通ふ調べのゆかしさに、

地語

駒の足掻きをゆるめつゝ、

聲を乗り道灌は、

頼む蔭とて賤が家の、

門邊に駒を立てさせて、

大千

いかに此家の内に物申さん、

今日此邊りの狩くらに、

兩具の用意もあらざれば、

しとどに濡れて候ひぬ、

哀れ一領の蓑を借し給へと、

聲さはやかに申しけり合……

大千 たのもふ人に驚かされ、

琴をかいたり静々と、

大千 衣紋つくろひ出で来しは、

冬「鄙に稀なる手弱女の、

年はいざよい花の面……」

山越「何れによしある姫百合の、

草葉がくれに世を忍ぶ、

氣色はいろに見へにけり」合……

地語 されば道灌目禮して、

今しも申し候如く、

蓑をば借して給はれと、

二た度三度いひけれど、

中干 答は絶えて口無し、

地語 露も溢れん微笑みを、

地語 たへて匂ふ山吹の、

一枝折りて捧げつゝ、

太田道灌

太田道灌

面はゆげにも差出せば、

いぶかしながら鶯の、

地語 それならなく山吹を、

孤鞍衝雨叩茅茨

少女不言花不語

去る程に太田道灌は、

中干

我今蓑を借らばやと、
其家の少女山吹を、

道灌其意をさとり得ず、

笠に縫ふてふ梅の花……

地語 かざして遂に歸りけり。

少女爲贈花一枝

英雄之心緒亂如絲

地語 近侍に出面ひ仰せけるは、

賤が家に立ち寄りしに、

われに與へて物言はず、

太田道灌

いかなる意のあるやらん、

中干 そは恐れ多き事ながら、

七重八重花は咲けども山吹の

實のつだになきぞかなしき……

かく云ふ古歌の意をとりて、

花によそへて答へしなりと、

地語 いでこれよりは山狩りを止め、

最愧らいて云はれしが、

地語 解て聞かせよとありければ、

地語 抑も是は、

七重八重花は咲けども山吹の

實のつだになきぞかなしき……

蓑一つだになき由を、

云はれて道灌大いに嗟歎し、

和歌詩文を學ばんと、

遂に詩歌に秀でけり……

松の廊下

秋『人は心に寄る波の、

啼く音ぞ今も残るらむ』合

……春『君が着まし、狩り衣は、

一二三四五までも、

今日九重に匂ふゆり。黄金の色となりけり、

遠く鳴海のはま千鳥、

昔し七重か八重山吹』合

……これ言の葉に咲く花の、

黄金の色となりけり、

……

松の廊下

さても元祿十四年、

三月十四日の東雲に、

地語

當時の將軍綱吉公、

大名小名悉皆く、

中干

中にも浅野内匠頭長矩は、

他に先じ種々に、

爰に吉良上野介義央は、

等しく未明に出仕なし、

大干

やがて勅使の登營に、

松の廊下

勅答あらん賀日とて、

柳營さして登城あり合

勅使饗應の役なれば、

心を碎き居たりけり。

式作法の師範とて、

差圖に親疎の偏頗あり、

驕る状こそ奇怪なれ合

間もあるまじき空の色、

松の廊下

春 『夜はほのくぐと明け初めて、

威儀を正せし諸大名』

夏 『袖を連ねて居ながれしは、

耀き渡る星かとも、

見ゆる許りの晴れの場

夏 『いとも光榮ある景色なり』合

此時内匠頭は玄關にて、

上野介に出會ひければ、

大干

勅使御迎ひの其砌、

中干

石垣の下まで進むべきか、

但し御箱段にて可然や、

御教示仰ぎ候と、

いとしとやかに問はれしに、

吉良は傲然聲あらく、

今に於て是程の事、

質くは粗忽の至りなり合

地語

貴公の如き不束者、

よくも役儀の勤まるも、

皆寛大の御治世よと、

中干

衆人中に嘲笑りつ、

尻目に掛けて入りにけり合

地語

左右に控へし旗本衆、

餘りの過言に手に汗握り、

伏目になりて居たりしが、

浅野内匠頭長矩は、

今の雑言日頃の無念、

一時に嚇と憤怒を發し、

兩眼血走り獅子奮迅、

狂ふが如く追ひ絶る合

上野介暫らく待てツ、

此程よりの汝が無禮、

最早堪忍なりがたし、

松の廊下

松の廊下

覺悟をせよと喚きつゝ、

眉見めけんに發石はつしと切付きりつけたり 合

……大干

小ちいさ刀がたなを拔ぬき放はなち、

切きられ遁にぐる上野かづのの、

吉良きちらは前まへにぞ打倒うちたほさる。

内匠頭たくみのかみの背うしろ面うしろより、

兩手りやうてを抱かへ組くみ留とめたり 合

……

武士ぶしのなさけに候さふらふぞ、

梶川かぢかは遂つひに放はなたざれば、

怨恨うらみを吞のみて囚とらはし、

中干

衿首えりくび丁ぢやうと薙はらぎ拂はらへば、

今いま一ひと太刀たぢと振翳ふりかざす、

大干

梶川かぢかは與よ三兵衛そへ走はしり寄より、

中干

無念むねん々々々々と悲かなしみつゝ、

松の廊下

心こゝろの中うちや如何いかならん、

嗚呼あ・たくみのかみいつてう
鳴呼あ・内匠頭たくみのかみ一朝いつてうの怒いかりにより、

地語

大事だいじを遂つひにあやまれり 合

實じつにや名なに負おふ大石おほいしの、

亡君きみが怨敵かたきを鳥とりが啼なく、

泉いづみが岳だけの苔こけの下した、

美名びめいを千古せんこに傳つたへけり。

思おもひやるだに哀あはれなり。

身みをも家いへをも打忘うらわすれ、

去されど重おもき任にんむ務むを身みに帶おびし、

旭あつ 『盡つくす忠義まことに時ときを得えて、

吾妻あづまに名な高たかき高輪たかなわや』 合

切き 美名びめいを千古せんこに留とどめけり、

河内の宿

河内の宿

散るを習ひの櫻井の、

歸らぬ父の歸りをば、

地語

叩く水鶏の音にさへ、

大千

頃は建武三年五月の末、

何松風の騒ぐなる、

敵が情けの贈り物、

教への露に袖ぬれて、

待つや河内の宿の戸を、

地語

出で、幾度眺めけむ。

夏

『降り添ふ雨の夜はたけて、

心の浪を鎮めつゝ』合

開けば哀れ思ひきや、

河内の宿

中干

無念の涙玉霰れ、

かく有ものと兼てより、

地語

變りはてたる此様に、

中干

悲歎の涙にかき暮れける。

地語

何思ひけんつと起ちて、

大千

母は怪やしく思ひしかば、

中干

相互に母も正行も、

地語

散るを習ひの武士は、

地語

思ひ儲けし事ながら、

大千

母子互ひに手を把りて、

地語

やゝありて正行は、

語地

持佛堂の方へ行きけるを、

中干

後よりひそかに立寄りつ、

河内の宿

中干

様子如何にと見てあれば

地語

父が形見の刀もて、

地語

既に自害と見えにけり、合……

此時母は正行の、

少さき腕にとりすがり、

聞かずや汝梅檀は、

二葉ながらに香ばしき、

汝幼なくあり迎も、

大干

父が子なるぞ母が子ぞ、

何とてかばかり血迷ひし、

地語

父が御身を歸せしは、

腹を切れとの爲ならず、

後を弔はんが故ならず、

地語

君何處にもましまさば、

旭 『我菊水の旗風に、
わがきくすゐはたかせ』

賊を亡し世を靡き、

河内の宿

地語

君が御代にもせよとなり』

地語

かくと自ら告げながら、

大干

君の御用に立たん事、合……

地語

思ひも寄らぬ事にこそ、

さとし給へば正行は、

少さき頭をうなだれて、

勵まされたる母上の、

御袖にすがりハ、ハ、ハ、と、

五臓を絞る血の涙、合……

嗚呼此の捨小舟如何にせん、

正行今は禮盤の、

上よりよゝと泣き降りん。

夏 『身ぞ浮草の涙川、
みうきくさなみだがわ』

情けも深きたらちねの、

川中島
教への庭に生ひ立ちて』合……
語り傳へて薫るらん、

名も楠の花の香と、
語り傳へて薫るらん。

川中島

地語 天文二十三年秋八月、

地語 越後の國春日山の城主、

地語 上杉入道謙信は、

八千餘騎を従へて、

中干 川中島に出陣あり合……

中干 其時謙信申さるゝに、

地語 加賀越前の奴原は、

中干 我父上の仇なれば、

之れを屠りて其儘に、

旗を都に押し立てし、

覇を中原に立てんとは、

兼ねての願ひなりしかど、

彼の村上が餘義なき頼み、

武士の面目もだし兼ね、

心ならずも信立は、

互に鏃を磨きつゝ、

人生朝露の身を以つて、

四郡の土地を争ふは、

地語 いと口惜しき次第なり合……

大干 されば此度の戦には、

中干 敵の旗本切り崩し、

一騎打して兎も角も、

地語 有無の勝負を決せんと、

地語 揉みに揉んでぞ進まるゝ合……

川中島

川 中 島

中干

隊伍整々旗鼓堂々

其武者振りの勇ましさを合

目に狐狸の跳るを許さず

百獸腦破裂すとかや

夏

「洩るゝ朝日の影さして

散り行く跡を見渡せば」合

眞黒々の圓陣は

地語 進むが如く退く如く

地語

威風四方を拂ひける

地語

猛虎深山を行く處

中干

獅子月明に吼ゆる時

早や東雲の雲の間を

地語

四方の河霧河風に

大干

旗さし物を押立て

必死を期せし越後勢

廻り廻れる駈引は

川 中 島

中干

河岸近く寄せし頃

春 『青の駿馬に黄の羽織

地語

もり返さん難儀なり

地語

一と先づ勢を揃へんと

色めき立ちて見えにけり合

罵り騒ぐ武田勢

是謙信が極意なる

スハ油断すな破られな合

車掛りの軍法ぞ

我が旗本を固めよと

中干 二萬と聞こえし大軍も

浮足立ちし兵なれば

北犀川の彼岸にて

中干

天晴れ武功の信玄が

大干

遙かに見ゆる武者一騎

白き頭巾をかむりつゝ

川中島

此方を目掛けて馳せ来るは

合

地語 敵か味方か何者と、

地語 訝り合へる一刹那、

大干 馬は疾風か電か、

中干 防ぐ兵士を斬立て蹴り立て、

中干 殺倒したる有様は、

只獅子王が暴れ出で、

群がる羊を討つに似て、

大 一面を向けん人もなし合

大干 勢ひこんだる謙信は、

大干 早や眼前に迫れども、

中干 老功無双の信立は、

地語 稲葉の末に吹く風の、

地語 そよとも動かぬ大磐石、

大干 池の眞菰やあやめ草、

地語 何れをそれと分きかぬる、

中干 同じ姿の武者七人、

おちつ 落着き拂つて居たりけり。

氣早の謙信之れを見て、

地語 武者振見事や武田殿、

中干 越後鍛への拳の冴え、

中干 イザ參るぞと大音聲……

三尺二寸の長光を、

おほげうだん 大上段に振りかざし、

中干 驀然にぞ斬り掛る。

大干 陽炎稻妻摩利支天、

地語 サシモに鋭き太刀風を、

軍扇持つて受止むる、

受けし軍扇斬り折れて、

地語 畳み掛けたる二の太刀は、

中干 左の肩先發矢と切る、

ついで 續いて上げし三の太刀、

川中島

川中島

大千 重ね掛つて睨み下げ、

正與麼時作麼生、

地語

八幡座より唐竹割り、

聲に應じて嚴そかに、

紅爐上一片雪、

微かに笑を含みしを、

莞爾笑つて夏一言葉なく、

北を指してぞ走りける』合

中千 獅子吼の聲も凄しく、

地語 答へに毛筋のすきあらば、

地語

夢ゆるさじと問ひ掛けたり。

根太き聲は響きけり、

答へし人の唇は、

心憎くや思ひけん、

駒引き返し只だ一騎、

来るに止むる者もなく、

川中島

中千 去るにも追はん人ぞなし。

中千 縦横自在に駈け廻る、

中千 敵も味方も目を見張り、

手に汗握る計りなり。

鞭聲肅々夜渡河

遺恨十年磨一劍

劍の下に大敵を

武道の花とたよへられ、

大千 千軍萬馬の其中を、

大千 傍若無人の振舞に、

アレヨくと打守り、

曉見千兵擁大牙

流星光底逸長蛇

秋 『討ち漏らせども後の世に、

千隈の河の水長く』

石 童 丸

いと香ばしき、俠骨の、
譽れを流し給ひけり。

切 譽れを流し給ひける、

石 童 丸

月に叢雲花に風、

地語 扱ても筑前筑後肥前肥後

地語 探題守護を司どる、

娑婆の無情を感じつゝ、

地語 加藤左衛門重氏は、

故郷に妻子を残しおき、

大隅薩摩の六ヶ國、

散りて果敢なき世の習ひ、

石 童 丸

地語 東雲鳥ともろ共に、

されば石童本意なくも、

弘法大師のいましめに、

頓て紀州に着にける。

母諸共に立ち出で、合……

父は高野におはすると、

十年あまりも過ぎて後、

諸國修業に出で給ふ、

地語 母を麓に残しおき、

杖を力に登り行く……

女人の登山は禁制なり、

爰に禮場高野山、

大千 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、
なれぬ旅路もいとひなく、

風の便りに聞しより、

石童十四の春の頃、

中千 實に光陰は矢の如し、

石童丸

大千鳥も通はぬ屏風岩、

春『三枯の松に五枯の杉

無明の橋にかゝる時』

其日は大師の花の役、

光明眞言唱へつゝ、

石童丸は登り坂……

知らねば側に立ちよりて、

二人の袖のもつれあふ、

地語

善悪二つの分け柳、

通り過ぐれば峯薬師、

苜萱道心重氏は、

右に花籠左に珠數、

御山を降り給ふ時、

大千

互に親とも我子とも、

見上げ見下す顔と顔、
血筋の因縁是非もなし。

中干

其時石童苜萱の、

御尋ね申す御僧様、

今道心となられしを、

何卒教へて給はれと、

見ればおさなき獨り旅、

國は何處ぞ名は何と、

大千

國は筑前博多にて、

加藤左衛門重氏と、

石童丸

中干

探題守護を司どる、

名乗れば苜萱驚ろきて、

衣の袖に取りすがり、

此の御山にて我父の、

御存じあらばお情に、

聞いて苜萱訝りつ、

御身の尋ぬる父上は、

問はれて石童涙ぐみ……

石童丸

持つたる花籠取り落し、
言はんとせしが待て暫し、

中干さては我子かなつかしやと、

御山の法は破られず合……

地語

自ら心を勵ませど、
露か雫か石童の、
幼な心に怪しみて、

地語

顔にかゝりて濡ければ、

歎かせ給ふは何故ぞ、

若し父上にてはおはさずや、大干

父上ならば片時も、

中干

早く名乗りて下されど、
落つる涙を振り拂ひ合……

我は父にはあらねども、

御尋ねありし其人は、

多き御弟子の其中に、

兄よ弟と睦みしが、

去年の秋の末つ方、

空しくなりし不便さよ合……大干

海山越へてはるぐと、

中干

尋ね來ませし甲斐もなき、
覺えず涙を浮べしと、

其心根を思ひやり、
聞いて石童驚ろきて、

わつと許りに泣き沈み合……

そは誠にて候か御僧よ、

地語

定めて御墓もおはすらん、
教へなされて給はれと、

哀れ御慈悲に其墓を、
願へば苜萱是非なくも、

石童丸

石童丸

持つたる花籠取り落し、
言はんとせしが待て暫し、

中干さては我子かなつかしやと、

御山の法は破られず合……

地語

自ら心を勵ませど、
露か雫か石童の、
幼な心に怪しみて、

地語

顔にかゝりて濡ければ、

歎かせ給ふは何故ぞ、

若し父上にてはおはさずや、大干

父上ならば片時も、

中干

早く名乗りて下されど、
落つる涙を振り拂ひ合……

我は父にはあらねども、

御尋ねありし其人は、

多き御弟子の其中に、

兄よ弟と睦みしが、

去年の秋の末つ方、

空しくなりし不便さよ合……大干

海山越へてはるぐと、

中干

尋ね來ませし甲斐もなき、
覺えず涙を浮べしと、

其心根を思ひやり、
聞いて石童驚ろきて、

わつと許りに泣き沈み合……

そは誠にて候か御僧よ、

地語

定めて御墓もおはすらん、
教へなされて給はれと、

哀れ御慈悲に其墓を、
願へば苜萱是非なくも、

石童丸

石童丸

石童丸の手を取りて、

石碑の前につれ行きて、

果敢なくなりし印ぞと、

のふ情なの此有様と、

やがて取り出す麻衣、

逢ふ事あらば進せよと、

地語

逢ふよしもなき悲しさよ、
此由聞かせ給ひなば、

その頃立てし新らしき、

是れぞそなたの父上の、

中干 見るより石童まるび伏し、

とこふ涙に暮れにける……

こは姉君が父上に、

携へ来しも仇となり、

麓にまします母上の、

さぞや歎かせ給ふらん。

大干

不便の者と思召し、

たつた一と言聞せてと、

前後も知らず泣きければ、

堪へし胸のため涙

共に涙に暮れにける……

石童丸に打ち向ひ、

地語

涙は佛の爲めならず……
母へ孝行盡されよと、

石童丸

石童尋ね來たかよと、

甲斐なき御墓に執りすがり、

後に立ちし蒨萱も、

思はずワツと聲を上げ、

斯ては果てじと蒨萱は、

歎き給ふは理りなれど、

早く麓に下り行き、

さとし給へば石童丸、

夜の鶴

冬

『涙ながらに立ちあがり、杖にすがりて下り行く』
後より見送る荻萱の、
思ひやるだに哀れなり。

夜の鶴

凡そ義の爲め道を忘れ、
例しを茲に姫小松、

地語 遺愛の三人の兒と、
わすれがたるみたり

切

振り返り見つゝ泣くくも、
幼な心を察しやり、
心の中は千萬無量、

道の爲めに義を忘るゝの、

引くもゆかりの常盤御前、

地語 大和に忍び居たりしが、合
やまとしの

大干

老母は其の爲め囚はれて、
嗚呼孝ならんとすれば慈ならず、
寧ろ孝道の爲め自首せんと、
かくて常盤は舊主なる、
妾幼兒の愛にまよひ、
自ら故に罪もなき、
はるくまかり上りて候。

地語 母の憂苦を救ひ給はれと、
は、い、う、く、す、く、た、ま

夜の鶴

夏

『誠を籠めし言葉の色、

きびしき析檻受ると聞き、
慈ならんとすれば孝ならず、
三兒を携へ出でにけり。
九條の七院に調へ申しけるは合……
今迄或る邊陲に隠れしも、
老母の憂目を悲しみて、
我等親子を六波羅に送り、

夜の鶴

いと哀れに聞へけり』合……

常盤の孝道に感激し、

大干 出して遣るもやらるも、

夏 『馴れし古巢も見納めと、

後見送りて入りかぬる』

小歌は更に見えざりき 合……

地語 今若乙若に打ちむかひ、

中干 いかは捜し出だされて、

されば女院を始め女官等も、

衣裳を調へ清車に載せ、

共に涙にくれ羽鳥。

打ふり返り眺むれば、

人もなさけの村時雨、

常盤は漸く涙を收め、

御身達は所詮逃れぬ平家の敵

亡はれんは必定のこと、

夜の鶴

さるに依て今より名乗出んとす 合……大干

未練の舉動し給ふなよと、

美事腹切て見せ申さんと、

大干 さすが源氏の後胤なりと、

つらき涙を押しかくし、

地語 母もともぐ、死出三途、

知死期待つ間ぞ悼しき。

めぐりて早き六波羅の、

幼少ながらも大將なれば、

いはれて兩兒は聲揃へ、

臆する色も見へざれば、

思へば又も湧き返る、

地語 よくも申して給はりしよな、

渡るも今日か明日か川、

旭 『うしや憂世は小車の、

館に車もつけさせて 合……

夜の鶴

押さへて言へるいぢらしさま合……

大干

常盤は益々咽せ返り、

情の浪の打ち寄せし、

夏『上見ぬ鷺の清盛も、

いかで涙のなかるべき』合……

退き去りていつか影もなし。

終に常盤の色香に愛で、

釋す事とはなりにけり合……

捨て操のたちまちに、

切を折られて折れぬ葉なり、
又も輝く白旗の』合……

靈馬漣

人ひととしいへば人ならぬ、

江かはに手馴れの水飲ひし、

地詩 語るもなかく哀れなり合……

神無月の十四日、

靈馬漣

起因もとを茲こゝに開きしは、
折られて折れぬ葉なり。

人ひともある世よに鴨緑の、

駒こまのこゝろの懐しさを、

中干 頃ころは明治三十有七年、

しかも沙河會戰の第五日、

靈馬漣

馬うまの主あるじは伊藤砲兵少佐いとうほうへいせうさにて、

打跨うちまたがりついさましく、

さして行方ゆくえは我軍わがぐんの、

腹帯はるびもけふは彌緊いやかたく、

『まだほの暗ぐらき月鹿毛つきかげの、

蹄ひづめに砂塵ちりをたてがみや』合

續つくつはものエイくと、

寄よせては返かへすさいなみの、

地語

おのが愛馬あいばの漣さいなみに、

翻あほりながらに出陣しゅつぜんせり合

『しめし陣地ぢんちや梓弓あづさゆり、

轡くつわの響ひびき憂々かつくと』合

駿馬しゅんめのあがき牙渡さえわたり、

招まねく尾花おはなに勵はげまされ、

押おすや砲車はうしゃの軋きしる音おと。

嘶いなく聲こゑと諸共もろともに、

靈馬漣

天地てんちも震ふるふ勢いきほひなり合

山やまの麓ふもとに下くだり立たちて、

是これ漣さいなみよ能よく聞きけよ、

野のにも山やまにも伏ふすとても、

盡つくすまことは千早振ちはやぶり、

汝なんぢを待たのむ際ときならず、

やがて凱旋がいせんするまでは、

地語

斯かくて少佐せうさは陣地ぢんちなる、

愛馬あいばを繋つなぎ別わかれを惜おしみ、

汝なんぢと吾われは束つかの間まも、

離はなれがたなき大君おほきみに、

神かみこそしろしめさるらめ合

此上こよなう近ちかき場所ばしょなれば、

暫しばしが程ほどは別わかるゝも、

こゝに鎮しづまり待まちてよや合

靈馬漣

また吾兎も角もなる時は、

妻子の許に送れかし。

愛馬のたてがみ撫擦すれば、

名残惜しげに我主に、

首に無限の愛惜を、

人ならなくもみの、

まことの色と知られけり』合

敵軍最とも優勢にて、

我なきがらを故郷の、

やよ漣よ聞き分きしかと、

馬はさながら物言ふ如く、

纏綿れ寄りつゝうなだるゝ、

『しめすや志賀の山櫻』

『立つる鬣たちまちに、

かゝる所に陣地より、

水郡大尉の舍弟、

靈馬漣

同苗上等兵喜市も戦死の由、

イデヤとばかり夕鹿毛に、

こゝろの駒は狂はねど、

鞭打つ如く振り放し、

しばし奮戦したりしが、

あはれ少佐の胸板を、

何かは以て堪るべき、

無惨の戦死を遂げたりけり。

報告連りに来りければ、

別れて少佐は去なむとす。

手綱引るゝ我胸に、

陣頭にこそあらはれ出で合

虚空に響く敵弾は、

ハツシとばかり撃碎けば、

さすが聞ゆる勇將も、

時しもあれや後陣に、

靈馬漣

撃つなげる愛馬あいばさいなみは、

中干 一ひとと聲高こゑたかくむせびしが、

留とむる馬丁ばていを跳退はねのけ蹴退けのけ、

中干 狂くるひ猛たけりて馳はせ登のぼる……合

頭かしらを下げつ眼めを閉とぢつ、

愁然しうぜんとして立たちたりしが、

物言ものいひたげに頭かしらを寄よせ、

地語 廳やがて軍服ぐんぷくの襟咬えりくわへつゝ、

何物なにものにか驚おどろきけむ、

忽たちまち頭絡づな振り断きりつ、

陣頭ぢんとうさして驀地まつしぐら

中干 瞬また間に少佐ひませうさの屍かばねに近ちかづきて、

流ながれし血汐ちしほを嗅かぎ廻めぐり、

遂ついに屍かばねを揺ゆり動うごし……合

悲かなしき鳴聲なきこゑ振絞ふるしほり、

地語 扶たすけ立たてむと試こころむる、

その心底こころねのしをらしや、

馬うまの心こころを酌くみ量はかり、

斯かくする際ひまも打うちしきる、

斃たふさむ事ことの可憐いとほしと、

愛馬あいばの鞍くらに昇かき乗のせて、

漣さやなみやうやく意こころを得えつ、

後姿うしろすがたぞあはれなり……合

中干 加かゝる靈馬れいばの新あたらしく、

靈馬漣

大干 並居なみいる勇將ゆうせう猛卒もうそつも、

地語 征衣せいいの袖そでを浸ひたしけり……合

敵てきの砲火はうくわに此馬このうままで、

少佐せうさの遺骸ゐくろを其儘そのまに、

地語 從卒じゆうそつをして引ひかしむれば、

トボくとして下くだり行ゆく、

大干 千里せんりの馬うまは古ふるけれども、

この聖代せいだいに出いづるこそ、